

---

## 短編集置き場。

桜ありま

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

短編集置き場。

### 【Nコード】

N1056M

### 【作者名】

桜ありま

### 【あらすじ】

続きを書くかもしれない短編小説の置き場です。ごった煮で置いておりますので、各小説の前置きで内容をご確認ください。

酔いつぶれて目が覚めたら後輩の家だった。 (前書き)

現代OL物・R15のちょっとマニアックな恋愛事情です。

酔いつぶれて目が覚めたら後輩の家だった。

「あれ？」

気持ち悪いような、身体がだるいような、まだ目を閉じていたいような。

あやふやな意識の中で目を開くと、目の前には浅黄の顔があった。しかも鼻と鼻がくっつきそうなほど、超近距離。

あーこいつまっぴげ意外と長いなあとボーっとしてると、声をかけられた。

「あ、起きました？ 先輩」

「ん、ここは………っ!？」

起き上がろうと思って、手を突いて起き上がろうとすると手が動かない。

私の両手は拘束されていた。

なんでだ、どうして？

「俺の部屋ですよ」

浅黄が身体を起こして、顔が離れる。

段々と意識がはっきりしてくると、見知らぬ部屋のベッドに寝かされ両腕を何かで一つに纏め上げられ、浅黄はその横に腰掛けている事が分かった。

たしか今日は、仕事で失敗してむしゃくしゃしてた。  
同じ部署の唯一の後輩、浅黄矢壱あきぎやいちに「おねーさんが奢ってやるぞ！」とか言って、酔いつぶれ後の保護者が出来たぜ！ やっほうと、つい飲みに飲んだ。

浅黄は仕事が出来るが、後輩としては先輩を立てる人間で、私が無茶言っても「仕方ないなあ」ってニコニコしてるような奴だ。

それが、どうしてこうなった？

私は一気に青ざめる。

「も、もしや……！」

「今の状況、わかってくれました？」

「私は……またやっちゃった？」

「え？」

「ごめん、浅黄。お前にこんなことまでさせちゃって」

「……先輩」

「私、分かってるから、お前がこんな事した理由」

「本当に、ですか？」

困ったような、ほっとしたような顔を浅黄は私に見せた。

それもそうだろう。

ベッドに先輩を両腕を縛って拘束している。

目が覚めて私が騒いだら、浅黄は完全なる犯罪者だ。

「私がお前にこうしろって強要したんだろ？ 私は酔いすぎると、  
変態になるんだっ！！」

「……………」

浅黄は固まった。

かなり間が合ってから、浅黄は口を開いた。

「は？」

「私の趣味につき合わせてごめんっ最近はこの癖なくなってたので油断したのにつー!!」

そう、私は酔うとその縛って、とか……口では恐ろしくて言えないことをおねだりしたりしていたようだ。

被害は主に歴代の彼氏だ。

そして次の日は即効別れ話を切り出されるという悲しい結末を何度迎えたか。

でも本当に、最近は全くそんな癖は出てなかったので本当に油断だった。

しかも相手は、可愛い後輩。

もしかしくてもパワハラというやつか。

「びっくりしたよな、私がこんな変態で」

「びっくりしました」

浅黄がうつむく。

「縛られるの好きなんですか？」

「いや、酔ってる間の記憶って全くなくって、お恥ずかしながら」

そういうながら、顔に手を当てたいが、拘束されている手は動かない。

「ないんですか」

「だから、すっごく恥ずかしいんで、出来たら忘れてもらえたらな  
ゝなんて？」

「忘れる……無理ですよ」

呆れたような口調だった。

うん、そうですよねー。

浅黄が言うのももつともだった。

私でも、会社と一緒に働く人間がこんな変態趣味だったら忘れない。

「まあ、とりあえず。ちよつと、これはずしてもらえるかな？」

つい、何時ものように手を動かそうとして、拘束している布だろうかが、手に食い込んで痛かった。

縛られたままだと、起き上がれないので、浅黄に頼む。

本当に、酔った私は何を考えているのだろうか。

縛られたって痛いだけなのに。

「無理ですよ」

「ん、きつく縛りすぎたのか？ 何で縛ったのかわかんないけど切るとか駄目？ 弁償するから」

「嫌です」

「そんな高価なもので縛ったの？」

「そうじゃなくて……本当に覚えてないんですか？ 酔いが醒めたからって話そらそうとしてませんか」

「なにが？」

記憶を手繰ると、飲んで愚痴言っ……別に話をそらすほどの会話なんて浅黄とはしていない。

「じゃあ、今の状況、分かってます？」

「え、ちゃんと分かってるって」

上半身覆いかぶされて、息が掛かるぐらいの距離で、目が合った。その目が何時になく真剣で強張っていたので、安心させるために微笑む。

「酔っ払って、介抱してくれてたんでしょ？ 誤解なんてしないから早——」

「誤解。して欲しかったんですが……いや、誤解じゃないかな」  
「？ 意味不明なっ!!」

さりと、右手で頬に掛かる髪の毛を払われて、その親指が艶かしく唇をなぞった。

指の温度が高くて、なぞられた余韻がやけに強く残る。

その動作だけで、今の状況はただの会社の先輩と後輩の爽やかな付き合いが、終わりにかけているということに気がついた。

「こんな格好、見て。俺が我慢できてると思ってます」

「し、信頼してるしっ……?!」

でも、その言葉とは反比例するかのごとく、浅黄の手は信頼を裏切っていく。

頬から、首筋、そして鎖骨に移動する。

目をそらした先の浅黄の胸元が、ネクタイをはずしてて……ちらちらと肌が見えるのも目の毒だ。

「だっ!!」

だめ！ と言い掛けた言葉だけで、浅黄の手が止まる。



「こ、こういうことは。いくら若さが暴走しちゃったからって手近で済ませたらいけないって言うか！　そうだ、私は浅黄が今の私みたいなかつこうしててもそそれませんから！　大丈夫！」

何が大丈夫なのか、よく分からないけど、心臓がどきどきしすぎて落ち着かない。

でもこのまま流れだけで進んじやいけないことは十分理解してる。

「誰でもいいって訳じゃありませんよ？」

「いや確かに行きずりのナンパよりは身元もしっかりしてるし、いかもしれないけどさ！」

「……………まだ、酔ってます？　先輩」

「次の日になったら後悔するようなことは、先輩としてもお勧めできないというか」

「…………先輩」

「いや、もう本当に浅黄の事はいいやつだと思ってるけど、そういう友達にはなりたくないっていうか」

「先輩？」

自分でも何言っているか分からないままに、この場を切り抜けようとおがいてみるが、自分自身混乱してる言葉は浅黄に届いているはずもなく。

「やっぱり、俺が言った事、忘れてるんですね」

「言うって？」

「先輩の事好きですって言ったんです」

「あーそうなんだ」

「一応、二度目でも緊張するんですけど、流しますか普通」

浅黄の言葉は、頭に入ってこなくって、意味を理解するのに掛か

ること数秒。

理解したらそりやもうパニック。

その仰天している私に気づいてないのか、浅黄は話し始める。

「告白したら、先輩、俺の両手を握って、凄く可愛いとろけた笑顔で『じゃあ縛って』って言うんですから居酒屋から連れ出すの大変だったんですけど、タクシーの中でもうるさいから、仕方なくネクタイで縛ったんですけどね、覚えてないですよね？」

「お、覚えてない」

タクシーの中でそんなことしていたとは！ と血の気が引く。

同じタクシーに乗れないっていうか乗りたくない！！ 乗ることもないだろうけどっ！

その反面、だから浅黄ネクタイしてなかったのかと、違うことに納得した。

いや、このシチュエーションでネクタイしてないのって、凄く…

そう考えて、私はネクタイをしていた浅黄を思い出してはっとなる。

「だから、俺的には好きな女とちよつとでもいい雰囲気になったのなら…逃したくないんですけど」

「そういえば、今日してたネクタイって！アレだよな」

「！ 人の話聞いてますか？」

「え、あ、ごめんっ！！ 聞いてなかった」

「……………」

あ、浅黄、俺なんでこんな人好きなんだろうって顔してる。

でも、私の発見はすぐに言いたいことだったので、かまわず話した。

「もしかして、そのネクタイって……今縛ってるネクタイって私があげたやつ？ とか」

「……そうですよ」

少しふてくされながら答える浅黄が、ちょっと可愛い。  
いやすつごく可愛い。

今まであまり深く考えたことはなかったけど。

考えてみればこの縛りたい癖。

縛りたい相手って歴代の彼氏とか、ちょっと好意をもっている相手ばかりだったような。

最近は全く出てなかったのは、好きな人が居なかったからで……

あれ、もしかして、縛りたいのって……

この特殊な癖で、自分の気持ちに気がつくなんてなんてやばいんだろう、自分と思いながら。

この癖を見ても二度目の告白をしてくれる奇特な浅黄に向かって、ポツリとつぶやく。

「私、浅黄が好きで……縛りたいのかも」

浅黄はその告白を聞いて、少し驚いた顔をしてから。

「俺でよければいくらでも縛りますから」

といって、機嫌を直して微笑んだ。

その台詞は精神的なものだろうか、それとも今みたいなものだろうか、どちらでもいい気がする自分は素面しらふでもやっぱり変態なのかもしれない。

## 風雲！魔王城（前編）（前書き）

ファンタジーっぽい何かな物語。

魔王も勇者も出てくるけど主役はただのメイドさん。

ハーレムっぽく見えてそうハーレムでもないお話です。

## 風雲！魔王城（前編）

この世界には何時の頃からか、魔王と呼ばれる邪悪な存在がおりました。

その魔王が住むといわれている北の国に、お城から勇者達が次々と魔王討伐に向かいますが……誰一人かえて来ません。国中が恐怖におびえる中ついにある日、その国のお姫様が魔王に連れ去られてしまいました、従順なメイドと共に。

もう何人も魔王討伐に向かった勇者が帰ってこないのですから。か弱い姫なんて帰ってくるはずもないのです。

この国の王様は大層嘆き悲しみ、国中は悲しみのムードにつつまれました。

そして、一方その頃北の国。  
魔王城。

「ルクレツィー……アアアア……！」

「は、はいはい！　ただ今っ！」

ぱたぱたと、陰気くさいお城の中を小柄で元気な影がよぎる。

「ちょっと、遅いじゃない！」

この城で二番目に立派な部屋から大声で、ルクレツィア……愛称レセアの名を呼んだのはロザリアンナ姫だ。

「申し訳ありません、姫様」

「まったく、トロイッタらありやしない。ナニをやっていたの？」

「二番目の勇者様と、庭園で庭仕事を……」

「なに手伝っているの、貴方は私のメイドなのにつ！」

「あ、でも……お世話になっているんですから」

「いいのよ！ 私たちを招いたのはま・お・う様自身なんだからっ！」

「招いたというか……居座っているというか……早く帰ってあげた方がいいというか」

「あれ？ 何言い争ってるの？」

ひょっこりと、開け放した重厚なドアの向こうの廊下から顔を覗かせたのは、素敵に無駄に爽やかな青年だった。でも外見だけではなくその内面も自然に爽やかなので嫌味がない。

その青年を見て、姫は先ほどの剣幕を引っ込めて、とてもかわいらしい猫をかぶる。

いつもながらにお見事だ。

「オホホ、何でもありませんわ、デイズ様」

「あ、一番目の勇者様こんにちは」

「こんにちは、挨拶が遅れちゃったね、ごめん。姫様、レセア」

「いえいえ、デイズ様」

「今朝の朝食はどうだったかな？」

姫様はこの一番目の勇者様がことのほかお気に入りだ。目がお邪魔でてけ！ になっているので、レセアはこの場を退散すること

にする。今から二番目の勇者様のところに戻って、庭仕事の手伝いと栗拾いでもしようかなと思って長い廊下をテクテクと歩いていると、この城で一番立派な部屋の前を通りかかる。

今日は……ご挨拶をしませんでしたけれど……大丈夫でしょうか？

少し、嫌な予感がしながらつつ、その部屋の扉の前に立つと、相変わらずすすり泣く声が聞こえるので、ホッとする。いや、泣いているのだからほっとしてはいけなのだけれど、コレが安心する基<sup>デ</sup>本<sup>フォルト</sup>設定なのだから仕方がない。

この部屋の中で泣いているのは、魔王様。

この城の主であり、ロザリアンナ姫様とレセアを攫ってきた張本人だ。

なぜ、魔王の城で帰ってこないといわれている勇者や攫われた姫やメイドが闊歩しているかという点。

魔王様は基本、引きこもりなのである。

「おそようございますー魔王様？」

ドアをノックしながら、レセアは一応声をかけてみた。

「な、なんだっ……!!」

泣いていたのがバレバレの鼻声で、声が返ってくる。

その後に、魔王様とは別の冷たい声がレセアに聞こえてきた。



「ああ、鍵は掛かってないから入ってくれば？」

「！　し、失礼しますっ！？」

扉を開けると、隅っこでシーツを握り締め、立派な黒い羽をぐったりとへたれさせて泣き明かしている、いい年した魔王様……ああ、シーツを洗濯しなきゃ！　と、高い天井までびっしりと作られた本棚の前に、三番目の勇者様がこの部屋の主人よりも主人らしく陣取って、人が殺せそうなほど分厚い本を眼鏡の奥の目を細めてひたすら読んでいた。

二人とも、入ってきたレセアには顔も上げない。

「何を……」

してるんですか？　そう尋ねかけたレセアの問いを間髪いれずに三番目の勇者様が答える。

「ああ、丁度読みたい本が魔王の部屋にあったからさ、読ませてもらった」

「読ませてもらってたって……」

こんなに号泣してる、魔王様放置ですか？！

「レセア、泣きたいときは泣かせておかないと。涙は心の汗だって言うだろ」

「何だか、深い話っぽく語ってますが、ひどいですよ。ほら、魔王様も泣き止んで……朝食は食べたんですか？」

「レセア……今日も起きたら何故余はこの世に生を受けたのだという悩みから突然、泣きたくなったんだ」

つまりは起きてから、何も食べてないということですね。

「い、今持ってきますからっ、だから泣き止んでくださいね？」

目をウルウルさせてレセアを見つめる魔王様のその漆黒の瞳は、まるで雨の中にうち捨てられた子猫。

レセアはその魅力に逆らえなくて、つい甘やかしてしまう。

たとえば、魔王様の外見がレセアより年上の二十台前半、体躯は立派な大人でも。

魔王様の容姿は、真顔なら超が付くほどの美男子だ。

透き通るような白い肌に、怪しく光るブラックオニキスの瞳。髪も夜を紐解いたような、サラサラの長い黒髪。赤い唇はなまめかしくつやめいていて、普通なら耽美で神秘的な雰囲気醸し出すだろう。

でもいつも真顔でいた例がないので、もったいないことに元は神がかり的に良いのに、三枚目的雰囲気しかない。しかも、その白い肌も長い髪も長年の引きこもりの結果だそうだ。色々と惜しい魔王様である。人間中身が大事だとはつきりと分かる標本のような人だ。でもそんな外見の美しさよりも、何よりもレセアの心を捕らえて離さないのは、魔王様の雰囲気と潤んだまなざし。それは耽美とか神秘性をはるかに凌駕する、母性本能や弱いものを守ろうとする父性愛にディープリンパクトを与えるのだ。

そう、この魔王様はある意味、魅力の目チャームを持っている。

「あと、三番目の勇者様にも持ってきますから！ もうちょっと明るいところで本読んでください、目が悪くなります」

そう忠告すると、レセアはあわてて厨房へと駆け出した。

一番目の勇者様デイズ様は、魔王様が実は人に害を与えないくて、ただこの城に存在しているだけの魔族だと気がつき、元来面倒見のいい（じゃないと勇者なんかやってられないだろう）彼は、魔王も討てないし、何より魔王が心配だしでこの城に滞在することにした。宿屋の息子の彼は、この城の厨房担当でこの城に暮らす勇者のリーダーだ。

二番目の勇者様ヴァン様は、一番目の勇者様の友人で、兼業農夫の兵士だった。一番目の勇者様の説得と、今にも死んでしまいそうな魔王様を見て、コレは捨て置けないと、魔王討伐は諦めたらしい。無口で朴訥で暖かい人柄の彼は、中庭で家庭菜園やら乳牛の飼育やら植木の剪定をしている。

三番目の勇者様トラン様は、一人だけちょっと違ってて、魔法学に興味があって魔王討伐に参加した。魔王を討伐しなくても、魔王城の書庫の本を読み放題だと知ると、あっさり討伐をやめる。魔法をコントロールする練習として、部屋の掃除担当だったらしい。

あと四番目と五番目の勇者、カレント様とサカント様は兄弟で二人一緒に討伐に来て、動物好きなお二人は魔王様のこの捨て猫のよくな目に、完敗したらしい。樵の息子のお二人は城の補修工事と食料調達を受け持っていて、二人とも「魔王にうまいもんくわせてやるぞー」といって毎朝狩に行って夕方には帰ってくる。

六番目の勇者様のソワン様と七番目の勇者様のオンズ様は元からコンビを組んでいた傭兵で、腕試しがしたかったのに、瀕死の金魚のような魔王様を見て盛大にがっかりしたのだが、人間に害をなしている魔物（それこそが魔王様の悪名の原因になった）がそこらにうろうろいるということを知ると……勇者らしく周辺の魔族をしばいて従える事にシフトチェンジしたらしい。時折この城に魔王様へ報告する為に帰ってくるらしいが、レセアはまだ会ったことがない。

というわけで、この魔王城は白雪姫と七人の小人ならぬ、魔王様と七人の勇者様がいるのだ。

そう、城下では攫われたと噂で持ちきりになっているのだって、本当は攫われたんじゃない。

魔王様は一番目の勇者様に、カウンセリングという名の説得を受けて、勇気を出して初めての和平交渉に来たのだ。……それなのに、お可哀想に魔王様。入る部屋を間違えてそれがよりにもよってロザリアーナ姫様のお部屋で、姫様に缶切り声を上げられ、逃げ帰ろうと転移魔法を使おうとした。

しかしかなりあわてていたために、そこへ一番初めに駆けつけたメイドの私が蹴飛ばしたバケツの効果もあいまって、姫と私も巻き込んで、魔王城に帰ってきてしまったのだ。

うう、ごめんなさい魔王様、私のせいで、悪名が一つ増えました。

でも、初めの頃はかなりおびえていた私たち二人に、何もしないから送り返すといってくれたのに。

姫様ってば、隣国のあまりかっこよくはない王子との縁談が来ていたのが嫌だったのと、一番目の勇者様に一目ぼれしたということで、居座っているのだ。

勿論、姫がいるならレセアが帰れるわけがなくて、ここにいたのだが。

時間が経つにつれてその心境は変化していた。

帰れません……この魔王様と対峙してこの駄目だめっぷりを見れば！ 胸の辺りがきゅーっとなってしまう。

レセアも魔王様をどうにかしてあげたいと、勇者様達と志を同じ

くしてしまった。

やはり、魔王様は魔です。

レセアは厨房によると、すでに帰ってきていた一番目の勇者様に、魔王様と三番目様の食事はありますかと聞いてみた。するとどうやら四番目様と五番目様が間違って狩の昼食として持って行ってたらしい。また作ろうか？ と嫌な顔一つせずと言ってくれる一番目様に自分で作ってみます！ というとぽんと頭をなでられて、いつか僕にも作ってねというお言葉と、材料は何でも使っていていいよというお許しも頂いた。

とにかく魔王様は意外と好き嫌いがないので、ここは三番目様の好みに合わせていただこうと思う。

ふわっふわな食パンを厚切りにして、それに縦に切り目をいれて袋状にすると、何の肉かは良く分からない四番目様特製厚切りベーコンをカリカリに焼き、目玉焼き、サラダを味付けしてチーズと共に押し込む。両面をフライパンで焼き、サンドイッチの完成だ。

そして、今朝二番目様の愛牛絞りたてのミルクをピッチャーに入れて、見た事もないほど作りは豪華だがどこかグロテスクな食器と杯を二つ持っていく。

「ワイルドだな」

レセアの忠告を聞き入れて、比較的明るい本棚の前に場所を写していた三番目様は、見た目に一言感想を言うと、視線はすぐに本に移した。でも手は黙々と食べているので問題はないみたいだった。魔王様用には、テーブルにフォークとナイフをセットし、席に提供してもらう。先ほどよりは幾分マシになった顔で、いただきますといわれて行儀良く食べ始めた……と思ったら途端、目に涙が溢れ出した。でも、顔は笑おうとしている。

「ど、どうしたんですか？」

「な、なんでもないぞ！」

「まさかっ!!」

砂糖と塩を間違えている。

もくもくと食べている三番目様に視線を向けると。

「別に集中していれば、食べられない味じゃない」

三番目様の優しさは少しずれている。

どうやら一番目様には、レセアの手料理を食べてもらうのはもっと先になりそうだ。

と、申し訳なく平謝りで二人から食べ物を回収していると、またもや姫様のオペラ歌手も真っ青な肺活量の華麗なる美声で、レセアを呼ぶ声がした。その声が聞こえた途端、魔王様はがくがくと震えだした。激しい姫様が凄く苦手なのだ。本心では丁重にお帰り願いたいのだが、あの剣幕でこの城に滞在させると詰め寄られると、首を立てに振るしかなかったらしい。

仕方がないので、姫様の部屋に行く前に一番目様に平謝りして、二人の朝食を作って運んでもらうことにした。下げた食べ物は捨て

るのももったいないので、ナプキンに包んで後で自分の昼食にまわす事にする。きっとマヨネーズさえかければ何とか食べれそうな気がするレセアは立派なマヨラーだ。マヨラーには何事も<sup>チャレンジ</sup>開拓精神が必要だ。

## 風雲！魔王城（後編）

やっこのことで姫様の声がした方向を探り当てると、そこは「入るな危険！」と書かれた紙が張られている部屋の前の扉だった。そういうえば、魔王様にこの城に滞在の許可をもらったときにここにだけは絶対入るんじゃない！ 入らないでくださいお願いします。と土下座されんばかりに頼まれたことがある。何があるんですかと尋ねても考えるのも恐ろしいと言いたげに「とにかく危険だ」の一点張りだった。

使用人としてのレセアとしては、そう家の主人に頼まれたのなら——しかもそれが曲がりなりにも魔王様なのであるし——危険があるんだろうな、と近寄らないようにしていたのだが、どうやら姫様は違ったらしい。

「今日こそこの部屋に入るわよ、レセア！」

そう誇らしげに言われても、魔王様がアレだけ頼んでいたのだからレセアは姫様の命令でもためらう。そして止めるのだが、勿論レセアに姫様を止められるはずがない。

「そうは言っても鍵もないですし」

「鍵なら手にいれました」

「え、いつの間にですか？」

「家宰室の鍵置き場に、でかかど入るな危険というタグをつけて置いてましたわ」

ま、魔王様ったら……むしろ目立ってます。



「本当に入って欲しくないなら鍵を捨てて秘密にしておけばいいのよ！ 入るな入るなといわれると入ってみたいくなるじゃない！」

「姫様、どこぞの芸人のネタですか……」

「ともかく！！ あんなヘタレが危険って言うものが信用できて？」  
「そういわれると……」

魔王様の性格を考えると、危険のレベルの水準はとてつもなく低く感じられます。

「案外、私達にはなんでもないことかもしれませんわ、それに何かあってもこの城には勇者様がいるじゃない！」

姫様のいう勇者の単数形はもちろん一番目の勇者様だ。

「いいわ、貴女がそこまで私に逆らうというのなら、自分であけます」

「！ わ、わかりました！」

姫様が、「入るな危険！」とお札のような張り紙を剥がそうとしたので、あわてて止める。姫様に危険なことをさせるぐらいなら幾分自分があけたほうが安全なような気がして、レセアは覚悟して張り紙に触れた。

———匂いが、する———。

まるで軽い静電気がような、ピリツとした感覚が指に伝わると、レセアは張り紙から手を反射的に離す。しかも声が聞こえた気がした。気のせいだろうか、嫌な予感がするが気を取り直してもう一度触れると、今度はなんともない。張り紙はあっさりと剥がれた。ので、姫様から鍵を受け取って鍵をはずすと、ドアノブを恐る恐る回

す。

「うわあああああああ！！」

「きゃあっ！！」

回しきる前に背後から悲壮な叫び声が聞こえてきて、振り返るとそこには、ゆらりと今にも倒れそうな魔王様がたっていた。

「あがががが……開けてくれるなど、アレだけ余が懇願したというのに……」

「フンッ、どうせ大したものでもないのでしょうか？」

「お、お前は知らないのだから、そういえるんだ！　こ、ここには本当に危険な奴が……いやまだノブを回したただけなのなら、セーフかも知れん……レセアゆっくり手を離して、余の後ろに静かに隠れるんだ」

「何よ！」

「しっ、お願いだから静かに、奴が起きてしまう」

「……魔王様、奴って？」

レセアは冷や汗をかきながら、ドアノブを音を立てないように放して、不機嫌な姫様の手を引いて魔王様の言うとおりにする。魔王様はまるで警戒している子猫のように、扉を凝視して視線をそらさない。

以下、小声で会話が始まった。

（こ、ここにはな、余の側近のミロワールが眠っているのだ）

（側近なら、何故貴方がこうおびえておりますの！）

（そ、側近といっても父の代からおるので、余は頭が上がない……）

（なんて、情けないこと！）

（で、そのミロワール様を起こすと怒られてしまうということですか？）

（いや、起こす分にはたいした問題じゃないのだが）

（なんなのはつきりお言い！）

（ミロワールはな、寝る前に余に宿題を出しておったのだ、それが終わるまでは起こしてはいけないときつく言いつけられていて……だから宿題が終わっていない状態で起こすとなると、とても余が怒られてしまうのだ）

「まあ、呆れた！ やっぱり大したことがないのじゃないの！」

（しいい……静かにするのだ、姫！）

その言い訳から分かるのは、想像を超えるハードルの低い理由だったのだ、姫は激怒する。

でもレセアは、少し嫌な予感がしたので魔王様に尋ねてみる。

（えーっと魔王様、その宿題って、何なんですか？）

（うう、世界征服……）

その言葉を聞いて、やっとロザリアンナ様も扉の向こうが危険だということが分かったらしく、おとなしくなった。

（ミロワールが起きていた頃はここも活気のある、魔王らしい城だったのだ、しかしある日魔王らしくない余に痺れを切らしたミロワールが全員をリストラし、一から自分の力で配下をつくり世界を征服しろと……）

通りで、城に誰もいなかった訳ですね、魔王様。

でもお話を聞く限りだと……更にとっても嫌な予感しかない。

（今、勇者様達が住んでるって、そのミロワール様が知ったら）  
（たぶん、余が怒られるだけでは済まないのだ。だから開けるなど  
言ったのに）

（そーれーをー早く言っておきなさいな！！！！）

（く、くび、が閉まるっ！！）

姫様が魔王様のマントを後ろから容赦なしに引っ張る。

だとしたら、先ほどレセアに聞こえた声は、「人間の匂いがする」  
って事？ そう考えるとサーツとレセアの血の気が引く。

（ごめんなさい、魔王様！ 私が悪いんです）

（そなたは、下がっている、レセア）

凄く、凄く脂汗をかいている魔王様。どれだけ怖いかが伝わって  
くるのに、でもレセア達を庇うように頑張って立ってくれているの  
でじんと来た。飼っている小型の愛犬がまさかの主人を助けるため  
に、人食い熊に立ち向かうレベルの感動だ。

（そんなことより早く、だったら私をお城に返して頂戴！！）

（今、転送の魔法をつかったら、確実にミロワールは起きてしまう、  
動くな）

どうやら、ミロワール様は現在夢かうつつかの状態で、些細な事  
で起きてしまいそうになるらしい。

心臓が止まりそうになる程の緊張の静寂の中、それはすぐに訪れ  
た。

————何をやっているのですか、陛下？————

冷氣のようなひんやりとした声がして、扉のノブがギリギリと回ってゆく。

段々と開いていく扉からもれるのは冷氣。

ドアの前で固まっている三人に戦慄が走る。

そこにゆっくりと現れたのは……これこそ正に魔王とでも言っているほどの、冷たい美貌と雰囲気を持つ青年だった。居るだけで、その場が支配されるような圧倒的な存在感。

白髪かと思われたのは光に当たると、水色がかったプラチナブロンド。魔王様の父親の代から仕えているといっていたので、お爺さんかと思ったレセアの予想は外れた。でも寝起きなだけあって、外はまぶしいらしく眉間には深い皺が刻まれていた。あ、ロザリアンナ様の美形アンテナが反応してる。けどこの存在感にいつもの黄色い声は出せないようだった。

「宿題は……どうやら終わっていないようですね？　ずいぶんと人間の気配がしますが？」

「お、おははははははははははよう、ミミミロワールウウウウ？」

射るような灰青色の目に恐怖のためか、いつもより多くカミカミしてあります、魔王様。  
はいせいしょく

「その人間は、奴隷ですか？　それとも食料イクニエでしょうか？」

「！！」

「ずいぶんとみすばらしい者と、高貴なものがいるようですがそれとも人質ですか？」

魔王様が姫を攫ってくるのは王道だ。

レセアはただのメイドなのでみすばらしいといわれても仕方が無い。

しかも今朝の庭掃除でエプロンもちよつと汚れている。  
なのに……。

「みすばらしくなどない!!」

今までのカミカミはどこへやら、魔王様は大声で激しく反論した。  
こんな堂々とした魔王様は初めてだ。

めったに見れない真顔で、かつこよく見えるレア顔だった。

「……陛下？」

「レ、レレセアはっ、大事な……友人だ。いつも優しいし、慰めてくれる、し」

「魔王様……」

ぎろ、と視線に益々力を入れたミロワールに、魔王様はすぐにいつものヘタレに戻ったけれど、レセアの感激は変わらない。

「まだ、そのような甘い事を仰られているのですか？ どうやら、

宿題は手も付けてない、と」

ひやりとした冷気が流れ出してくる。雰囲気ではなくて、魔法なのか本当の物理的な冷気。

「……………」

魔王様は打ち捨てられた子犬のように、プルプル震えている。そこでこの冷気の中、手足が悴みそうだけど、レセアは雛を庇う親鳥のごとく、勇気を出して進み出た。ミロワールの眉毛が微かに上がる。

「何ですか？ 人間の小娘如きが私に何をいたいたいのですか」

「ま、魔王様は、魔王様なりに、友達を沢山作ってます!」

「私は、世界征服のために部下を作りなさいといったはずですが？」

「魔王様には力を貸してくれる、友達が必要だと思っています！」  
「フッ、貴女のような？」

勢いで進み出たはいいものの、レセアも彼の雰囲気飲まれそうになる。

目を反らしたら、殺される！ そんな直感。

でも、彼はそうは全く見えないが蟻に慈悲を掛けるかのごとく、レセアに温情を与えていたのを魔王は分かっていた。

「証明して見せます」

「どうするのでしょうか？ 聞かせていただきますでしょうか」

貴女のその勇氣に免じてと。圧倒的な上から目線、たかが小娘如き何が出来るとですかと、目が語っていた。

レセアは歯の根の震えを堪えて、思いつき深呼吸する。

そして、肺に思いつき空気を貯めると、両手を口に当てて思い切り叫んだ。

「皆さんーーーー！！ 魔王様がピンチですっ！！！！！」

困ったときの勇者様頼み！

皆来る、きつと来る。

来てくれる！

その瞬間、冷気が消える。

一番初めにやってきたのは、魔法で移動してきた三番目様だった。

「丁度いいところだったんだけど」

その手には、相変わらず分厚い本を持っているが、レセアが先ほど見た本とは表紙の色が違っていた。

「ふーん、流れる氷の貴族アリストクラット・デ・ラ・グレールミロワールか」

「ほう、私の事を知っているのですか？」

「まあ城の本やら肖像画やら見たからね、画家は……腕が悪いみたいだね。まあ無理も無いかアンタの前だと、普通の者なら手が震えるだろうし」

おお、流石勇者様！　ギスギスとしているけれど普通に会話している。

魔王様は相変わらず、がくがくぶるぶるしてますが。三番目様が来ると、熱い視線を投げかけた。まるで悪戯した子供が父親に起こられている時に、母親に庇ってもらってるの図のように。

三番目様が薄氷の上を歩くような会話をしている間に、一番目様と二番目様も慌ててやって来る。

やっぱり、皆来てくれた。きっと四番目様も五番目様も六番目様も七番目様も来てくれるんだろうと思う。

「さて、揃ったけど、これ以上魔王をいじめるというのなら、僕達にも戦う意思はあるけど」

時間稼ぎだったのか。

三番目様を中心に、一番目様と二番目様は魔王様と私達を守るように立ちはだかった。

かっこいい……。

案の上姫様は一番目様にハートを飛ばさんばかりにメロメロだ。



「……そうですね、魔王様へのお仕置きは貴方達を倒してからじっくりやることにしましょうか」

「!?!」

「せいぜい、待っていなさい……」

そう言うか言わないかの内に、ミロワールの身体が光り始め、そこだけ風が吹いたように服や髪がたなびく。魔法は全く分からないレセアだが、これは凄い魔法を使おうとしていると分かったので、三番目様を反射的にみると、どうやら、三番目様にも計り知れない威力のようで、顔は難色を示していた。

「どうしよう、私のせいだ!!」

レセアは自分の軽率な行動を後悔したが、ただのメイドで一般人は動くことも出来ない場だ。

「どうしよう、どうしよう……そう心の中が埋め尽くされる。」

そんなレセアの視界の中を黒い影が、動く。

「や、やめてくれ! ミロワール!!」

魔王様が、生まれたての子羊のように震える足で、ミロワールの眼前に進みでる。

「そ、その皆……余の友達で……大事な大事な友達で……!」

その声はもう、涙も鼻水もぐちゃぐちゃになっているような悲痛な叫び。

「……………」

魔王様の泣き落としにはなれているのか、ミロワールの様子は変わらない。どんどん何かが集まって行き、吸い寄せられるような感覚に襲われる。一番目様も二番目様も剣を構えているのがやっとの

体で、三番目様は何か集中するようにつぶやいている。レセアと姫様は立つことも出来ない有様だった。

「だから、余は、命じる！ 悠久の氷山の一族エテルネル・フェ・デ・ネージュであり、流れる氷の貴族アリストクラット・デ・ラ・グレールミロワールよ、止めよ！」

その「止めよ」だけは凜とした声は、室内に響いた。  
シンとなる室内で、どれだけの時間が経ったのだろうか、ミロワールの様子が静かに変化する。

「もしや、最終形態！？」

ぐっと姫様を庇うようにレセアは抱きしめると、聞こえてきたのは……

「分かりました、陛下」

あっさりとした、信じられない言葉だった。

顔を上げると、命じた魔王様も信じられないようだった。

そして私達なんて、もっと信じられない。

「え、本当に、本当に？」

「ええ、命令には従うしかありません。陛下が私に命じることなんて今まで一度も無かったことですしね……陛下成長いたしましたね。まあ魔族の部下ではないのですが、人間のそれも勇者にここまで見込まれたということも上に立つものとして、少しは成長なさったということでしょう、紙一重で合格です」

「っ……！！！」

「それにしても、陛下。宿題の件は後でたっぷりと話すことにしますが。私を起こすときは冬にしてくださいと、ご忠告申し上げたはずですが？」

「へ、え？ そうだったかな」

「私は寝起きが悪いんですと申し上げたでしょう？ このホカホカの陽気、最悪な目覚めですよ」

どうやら今までのツンツンした態度は……寝起きの悪さで、先ほど眠っている間に溜まった魔力の大量消費、ガス抜きをしたおかげで、少し機嫌が直ったらしい。

「私が悪いんです！ すみません、私に出来ることなら何でもします！ だから魔王様と勇者様はお許しください」

やっとただの人であるレセアが動ける空気になると、レセアは思い切り謝った。

封印をといたのは、レセアの所為だ。

ミロワール曰く人間の小娘風情が、出来ることなんて限られているけれど。

レセアはそうミロワールに言うしかない。

「命に縛られているので、もう貴方達と戦うつもりは無いのですが」  
彼は青灰色の目を少し見開くと、レセアのポケットを優美に指差しこう言う。

「では、貴女のそのポケットの中にあるものを、私に差し出しなさい」

「え、ポケットですか？」

邪険にされと思ったその提案はあっさりと受け入れられた。

けれどその提案は……エプロンの中には先ほどの、失敗作を包んだナプキンが入っている。

どうみても目の前の魔族の青年が欲しがるものじゃないので、レセアはためらった。

「いいから早く、私はお腹が空いているのです」

「で、ではあの新しい料理を準備させていただきましたので」

「私はコレがいいといっているんですよ」

何年眠っていたのかは知らないが、空腹は最大の調味料って言われるけれど、差し出すのには勇気がいったのだが、時間が経つにつれてミロワールの機嫌の雲行きが怪しくなっていくので、おずおずと手渡した。

信じられないことにミロワールは、それはもうおいしそうに食べている。

「先ほどから、いい匂いがしていたのです」

「匂いって、そういうことでしたか……」

「後は、トマトソースがあれば完璧ですね」

立ちながら食べているのはお行儀が悪いようでいて、まるでそれさえも絵の題材のように洗練されている。でも食べている料理は、普通の味覚を持つものなら、しかも魔王様には泣くほどの不味さだ。こんなに完璧に美しく恐ろしい魔族が味覚音痴でそしてさらにケチャラー……いやケチャッパー？　ですか！！

「そうですね、貴女をみすばらしいといったのは撤回します、このように素晴らしい料理を作れるとは」

「あ、ありがとうございます、す？」

褒められてるんだけど、レセアは素直に喜べない。

でもみすばらしい餌から使用人ぐらいにはレベルアップしているようなので、お礼を半疑問系で言ってみる。

「貴女は私のモノになりなさい」

その台詞で、この場が凍りついた。

こんな悶絶ものの言葉を超絶美形にそう熱っぽく言われても、レセアは全然ときめかない。だって、「モノ」って本当に下僕ヒト以下の意味で言ってるんだと思うのです、この魔族。

「無理です!」

「だ、駄目だミロワール! レセアは余の友達だ」

「友達でも、私専属のコックにはなれるはずですが」

「いやだ、いやだ!」

「陛下、友情に束縛は見苦しいですよ」

えーっととりあえず、持ち場に帰っていいかな? という勇者様達の視線の中。

やっとのことで、一日に一回ミロワール様に食事を作るって事になったのだけど、どうなるんだろう。

色々とごたごたがカタずいた後、勇者の皆さんには謝りに行きました。

レセアの浅慮で、皆さんを命の危険に晒してしまったのだから、当然のことだったのだけれど。

すると、皆さん言葉に違いはあれど「呼んでもらって嬉しかったよ」的な内容で褒めていただけました。

命の危険があったのに、皆さん本当に、いい人たちです。

そして魔王様に凄く甘いです。

魔王様がちょっと羨ましい。

そして姫様は、あの一件からか、少しおとなしくなりました。  
でも、いつもの調子に戻るのは時間の問題みたいです。

そんな感じで国元の皆様ごめんなさい。

魔王様と七人の勇者様と攫われた姫様と……メイドは今日も元気  
です。

## ある青年とメイドのお話（前書き）

ファンタジー世界で主従モノ・R15

旦那様にプロポーズされたメイドさんのお話SS。

## ある青年とメイドのお話

小さい頃からメイドとしてセドラがお仕えしているサージュント様は年頃で、いつ結婚してもおかしくない年齢だ。

貴族の次男坊という微妙なお立場ではあるが、長男様から一部の権利を受け継いで起業したり、投資したりと、それが成功して羽振りがよく……貴族というよりも企業家として独自の生活を営んでいた。

そんなは旦那様は仕えるメイドとしての欲目からではなく、素晴らしい頭のよい、一介の使用人にも一度も怒ることなく優しく諭してくれる素敵な方ではあるが、仕事人間だった。寝る間も食べる間も惜しんで仕事に駆け回り、倒れそうになったことも一度や二度ではない。庭に優雅にお昼寝をしているのかと思いきや、空腹で倒れているだけだったりと、大変世話が掛かる旦那様だった。

セドラは旦那様が食事の席に現れないときは、ポケットにこっそりと焼き菓子を忍ばせたり、くつろげるようにと安眠のポップリを差し入れたり、お茶を出したり、メイドの身で僭越ながらも、お体に気をつけてくださいと忠告していたが。そんな旦那様だからか両親から結婚のお話もよくくるし、周りからもよい縁談のお話が沢山来る。しかし、穏やかな彼も、いつも大量に舞い込む縁談を断り続けるにはうんざりしたようだ。

だからってあんなことをおっしゃるなんて……そう、セドラは心が乱れる。

そんなうんざりした旦那様に、内密に夜に寝室という場所に……急に呼ばれたセドラは、何故呼ばれたか分かっていった。こんな、誰か他の使用人に見つからないような時間に私室に呼ぶのは、「あの



返事」が聞きたいからという理由しか思いつかない。

サージュント様はうんざりしたお見合いを止めるため気がついたのだ。

結婚すれば、お見合いの話が来ないと。

それで「お見合い除け」に、セドラにプロポーズしてきたのだ。それで何故、使用人であるセドラに白羽の矢を立てたのか、頭のいい旦那様の考える事はよく分からない。

ずっと今まで一緒にいたから、セドラとならこれからの長い人生一緒にいても上手くいきそうな気がするとか。自分が自由に生きるためには、妻に財産なんて求めないとか。色々と普通のプロポーズとはかけ離れた言葉を沢山いわれたような気がする。

その口調はまるで仕事相手<sup>ビジネスパートナー</sup>に話すような口ぶりで、一風変わっていた。

少なくとも旦那様が必要としているのは、長年一緒にいても不自然でなかったセドラのようだった。

旦那様は優しいが、仕事人間で恋愛面に関してはどうでもいいらしい。

結婚に愛するという感情に対しての重きを置いていないようだ。仕事が好きくて、仕方ないといった風で、それを邪魔しない妻なら誰でもよさそうで。

その条件に今一番近いのがセドラだということだろう。

悲しいことに、それでもセドラは嬉しいと思ってしまう。だって、セドラは旦那様が好きだったからだ。

「サージュント様」

「セドラですか、入ってきてください」

「よ、よろしいですか？」

「ええ」

旦那様のお許しがでると、セドラは寝室に躊躇い無く入る。  
寝室なのに、書斎のように書類や資料が山積みされていた。

「少しは、躊躇って欲しいのですが」

旦那様の弦きが微かに聞こえたが、セドラは何の事だか分からない。  
い。

「今日は、その。お返事を……」

「ええ、貴女の返事が聞きたくて、呼び出してしまつてすみません」

「あの……」

言いにくそうにしているセドラに、旦那様は優しく微笑む。

「ああ、断ったからといって。貴女をこの屋敷から追い出すなんて  
事はしませんから、安心してください」

「そ、そういうわけじゃ……」

セドラは親を早くに亡くし、頼れる親戚もおらず。

この屋敷という働き口を失えば、路頭に迷うことになる。

「あ、あの。あのお話、私でお役に立てるのであれば、お受けした  
いと思うのですが……」

「……………」

「サージュント様には本当に並々ならぬご恩がありますし、私は返  
すことができません。なので……」

旦那様のプロポーズに「はい」というのは並々ならぬ勇気が居る。

これからの旦那様未来のことを考えれば、ここは断るのがベストな選択だ。

セドラ自身のことを考えても辛くなるばかりのことだと分かっている。

でも、好きな人からのプロポーズを断ることなんて出来ない。

それが、たとえば、そこに愛が無くても、だ。

だから旦那様の負担になる事……好きだとは言わない。

それを告げた瞬間に、求めてしまうから。

誠心誠意、今までのご恩に報いるため、旦那様の望むままに妻としておつかえしたいと……セドラはいいたかった。

それが、セドラの愛の形。

「そうですか、分かりました」

そんなセドラの精一杯の思いをさえぎる様に、旦那様は言った。

「どうやら私は貴女に、恩を売りすぎたようですね」

「？」

「来てください」

「は、はい？」

旦那様の台詞の意味がよく分からないまま、促されるままにセドラは旦那様についていく。

そして急に腕を引っ張られた。

ぐらりと視界が揺れて、反射的に目をつぶると、衝撃はやわらかく。

恐る恐る目を開けると、旦那様の顔が近くその表情は硬い。

旦那様にベッドの上に押し倒されているのに気がつくときセドラはあわてた。

「サージェント様！？　もしかしてまた具合がお悪いのですか？」

「……この状況で、そんな台詞が出るほど信頼されるのは嬉しいよりも、悲しいですよ、セドラ？」

「え？」

セドラの頭が回りきらないうちに、旦那様はセドラのメイド服の首もとのボタンをはずしていく……そしてブラウスの胸元まで下がついていくうちにある一つの答えが出たのだが、セドラは信じられなくて、旦那様に訴える。

「あ、あの。こんなことするには何か理由があるんですよ、ね？」

「私は何故、こんなことをするのか分からないのですか？」

「わ、分からないですっ……！」

言いながらも旦那様の手は止まらなかったもので、ボタンをはずさず開放的になったブラウスから下着がちらちらと見えていて……もう、セドラは旦那様の行動の意味を誤解することが出来ない。

「だ、駄目ですっ……っ！」

「私の役に立ちたいと言ったのは嘘、なのですか？」

「そ、それは……あっ……！」

「貴女が悪いのですよ」

覆いかぶさるように、首元に唇を落とされて、くすぐったいような熱いような、恥ずかしいような色んな感情がない交ぜになったセドラは、逃げたくて仕方が無くなった。でもいつもの旦那様なら、

セドラは恥ずかしさに消え入りたくなりながらも、そのまま身を任せていただろう。

しかし今の旦那様はいつもの穏やかな声とは違い、少しだけ怒りを含んでいて。

しかも責める台詞……それを見逃せなかった。

今までそんな感情を旦那様に向けられたことがないセドラは、混乱したからだった。

そして、自然と涙が溢れてくる。

「やっぱり……駄目ですっ!!」

旦那様の事が好きで、ドロドロに溶け合いたい感情がある一方。

旦那様の行動は一方的で……怒っているように全身で感じられた。

この行為が、愛から来るものでもなく欲から来るものでもなく、暴力だと感じるほどに。

いままでずっと、穏やかで……一度も怒ったことが無い旦那様なのに。怒らせてしまうようなことをしてしまって、胸が苦しく。そして、理由が分からずセドラは謝ることしか出来ない。

「ごめんなさい、サージュント様……」

旦那様の手も行動もすでに止まっていたが、セドラは何度も泣きながら繰り返した。

「夜に、男の寝室に来るという事がどれだけ危険なことか分かりましたか？」

「ご、ごめんなっ……」

「私と結婚したら、こういうことを貴女に強要してしまうという事なのですよ」

「っ……」

「恩や義務感だけで、貴女は出来ないでしょう？　ですから、断りなさい」

「……で、でもっ」

「私の事は気にしないでくださいと、言っただけですよ？」

「ち、違っ」

いきなりの行動と感情の揺れに、涙がとめどなく溢れてくる。

旦那様の口調からは、怒りはすっかり消えていつもの穏やかな口調に戻っていた。

「わ、私はっ……旦那様と、結婚、したい……です」

「まだ、貴女はそんな事をいうのですか、忠誠心もそこまで行くと迷惑ですよ」

「ど、どして、そんなこと、言うんですか？　求婚プロポーズしてくれたのは

旦那さまなのに」

「これ以上、わたしを惨めにさせないでください」

惨めとはどういうことだろうか？　旦那様の言うことがとつさに理解できなくて、セドアはすでに離れて背を向けてベッドの縁に座っていた旦那様の背中を見つめる。

こういう事は初めてで……。

自分が旦那様が怒っている理由の方が知りたかったから、旦那様の行為を止めてしまったのが旦那様の気に触ってしまったのだろうか、でもその前から旦那様の機嫌はうっすらと悪かった。セドアには分からない事尽くしだ、でも一つ分かっているのは、今旦那様を引き止めないと、永遠に失ってしまうことだけだ。

「サージュント様が怒っているのが……怖くてその混乱してしまいました、その、もう大丈夫ですから」

自分の今の格好をすっかり忘れて、旦那様の背中につきつ。  
嫌われなくなかった、失いたくなかった。

「だから……続きをしても、だ、大丈夫です」

自分の大胆な台詞にセドアの声は震え、顔から火が出るかと思っ  
た。

しかし、旦那様はセドアの手が前に回り抱きしめようとした瞬間、  
体が強張りその手をゆっくりとはずし立ち上がる。完全な、否定。

「私とは……もう、結婚したくないですか？　そ、それなら諦めま  
すから」

旦那様はこちらを向かない。

とても長い沈黙の中

「結婚したくない？　結婚したいに、決っているでしょう……」

搾り出すような、声だった。

だったら何故？　そう言いかけるセドアに振り向く旦那様の瞳は、  
感情を抑えこんでいるように揺らめいている。

「でも、貴女は私を好きでいてくれる訳じゃない、そんな貴女  
を無理やり妻にするぐらいなら、このままなにも変わらず、側にい  
てもらおうほうがいい。結婚がしたいんじゃないんですよ、私は貴女  
に好かれないんです」

「……で、でも」

「だから、気にしなくていいのですよ、分かっています」

「サージュント様は分かってません！　わ、私がどれだけ勇気を出  
して、こんなことしたのか、分かって欲しいんです」

「ですから……っ!？」

セドラは、もう聞きたくないといわんばかりに、旦那様の唇を奪い取る。

ひんやりとした感触。

なのに、触れた先からセドラは熱くなる。

旦那様は信じられないといったように、セドラを見つめた。

それはそうだろう、セドラだって自分の大胆な行動が、信じられない。

「話を聞いてください、旦那様」

「……………」

いつもの旦那様らしくない、いつもならどんなに失敗しようが、きちんと話を聞いてくれて、優しく諭してくれるのに。今日は全くセドラの言葉を聞いてくれない。

まるで、聞くのを恐れているように。

だから、セドラは——決心する。

「私は、旦那様の事が、好きです」

「え？」

「好きだから求婚をお受けしようと思ってました」

「しかし、貴女は、私に恩返しがしたいから受けると……」

「それは、好きだと思ったら、私。サージュント様に求めてしまうと思ったからです」

「求める？」

「サージュント様の……心を、です」

「何故、求めてくれないんですか？」

心底、訳が分からないといったように、旦那様は言った。

「それは、旦那様に負担になると思ったから、です」



「負担？」

「旦那様は、私に求婚してくださる時に私が妻になったらどういった事になるとかそういうことしか言ってくださらなかったの、私の心は必要ないのかと思ってました、だから」

「それは、貴女が私と結婚したらどれだけ利点があるのかアピールしなければ、貴女は私を選んでくれないと思っていたからで……」

商談の場での勝利の秘訣は、いかに利点があるかをアピールし、自分と組むことがどれだけ相手の有益になるかと、他社と比較されて選ばれなければならない。

「その、私はそんな言葉より……」

「ええ、そうですね、私も恩だというよりも」

あなたがすき。

ただその一言で、よかったのに。

「……あの、もう一度求婚しなおしてもいいですか？ セドア」

「は、はいっ！！」

「セドア。私は貴女が好きです、だから結婚してください」

「はい。私もサージュント様が好きです」

その答えを聞いて、蕩ける様な笑顔を浮かべた旦那様は、セドアを抱きしめようと手を伸ばし……はっとしてセドアから目を離す。

セドアはただそれだけの動作なのに、不安になった。

「ど、どうかされたのですか？」

「い、いえ。自分がしたことはいえ目の毒だ……」

「？」

どういうことだろう？ セドアは少し考えてから、自分の格好を思い出して、顔を真っ赤にして服の前を合わせて握る。

気恥ずかしい雰囲気は二人の間に漂う中。

「この続きは……結婚してから求めてもいいのでしょうか？」  
「……………はい」

消え入りそうな声で返事をするのが、いっぱいいっぱいなセドアだった。

## ある青年とメイドのお話（後書き）

実は旦那様の求婚で

アリメアが求婚を受けていたらというverも書いていたのですが  
求婚を受けない方がアリメアらしいとそっちの方を採用し  
没にした話をベースにちよつと短編風に仕上げてみました。

**あるガヴァネスの苦悩。(前書き)**

中世ビクトリアン風モノ・ダークインモラル?・R15  
あるガヴァネスの苦悩。SS。

## あるガヴァネスの苦悩。

モリーネⅡガーナードは人目につかないように、住んでいる教区とは離れた教会にひっそりと訪れた。

見慣れない教会……の奥にある懺悔室の告解室に入る。

暗闇の中、しばらくするとあちらからも人が入ってきた音がして、モリーネは緊張した。

「どうされました、迷える子羊よ」

くぐもったような、抑揚の無い、低い男の声が聞こえてくる。

「聞いてくださいませ、牧師様……私は私、取り返しの付かない過ちを犯してしまいました」

「どういった過ち、と？」

「そ、それはっ……」

この場所に入ってもなお、モリーネはその過ちを告白することのためらう。

その罪は……とて許されざるものだから。

「ここの中は俗世とは切り離された世界。貴女の罪も許される場所です」

ぼそぼそと、感情の见えない声でそういわれるとモリーネの心は軽くなる。

そう、ここはどんな罪でも赦される――――

自分の心の中に留めて置くにはあまりにも重過ぎる「それ」は、誰にも言えず。

しかしその重みで何処へもいけない。

自分勝手な事にこの場所を訪れるしかなかった。

「き、聞いていただけますか？ 牧師様」

「ええ、その為に私はここに居るのです」

モリーネは胸の中にある、重荷を下ろすように、ぽつりぽつりと語り始めた。

モリーネはある貴族の家の家庭教師だ。ガヴァネス

中流階級の家に育ち、幼い頃から見目もそんなに麗しくなかったモリーネは勉強だけは良くでき、そして兄弟達に勉強を教えることが楽しくて、その影響でこの職を選んだのだ。

その貴族には、8歳になるお坊ちゃまと4歳になるお嬢様。

そして生まれたばかりの赤ん坊がいて、長い間、モリーネはそのお子様達の家庭教師をした。

幸せだった。

よく、家庭教師に生徒を教える以外の仕事を割り振る家もあったが、この家の旦那様と奥様はお優しく、裕福であったために、それぞれの仕事の領分を侵すような割り振りはされていない。

三人の子供達も、子供らしい我侭はあれど、優しく賢い生徒で。

家庭教師は家庭教師としての仕事だけに集中する、充実とした毎日だった。

しかし、そんな幸せは、翳りを見せる。  
今から考えれば、これが発端だったのだろう。

「ミス、モリーネ」

坊ちゃまが12歳の誕生日を迎えた頃だったろうか。  
いつもは「先生」と呼ぶのに違和感を覚えて返事をする、彼は幼げな顔を真剣な表情にして、こういった。

「お願いです、私が大きくなったら結婚してください！」

「だめえ、先生はアンネリーのなのお！」

ほほえましいプロポーズに頬を緩めると、お嬢様が坊ちゃまとモリーネの間にわって入ってくる。

彼との年の差は、8歳程度……といえどこの年頃には年上の女性にあこがれるものだ。

大きくなれば、こんなことも言ったよな、とからかわれて頬を赤らめる程度の思い出になるのだろう。と、モリーネは深刻には受け取らず、坊ちゃまにこう返事をする。

「そうですね、坊ちゃまが私の年を追い越したら、考えさせていただきます」

「ほ、本当に？ 本当？」

「ええ、約束です」

そして、モリーネはその約束を、すっかり忘れ去っていた。

いや、時折、アンネリーお嬢様の冗談のようにからかわれていた  
ので、完全には忘れていなかったのだが。時と共に自然と忘れ去ら  
れる約束だと思っていた。

時は過ぎ、坊ちゃまは旦那様の代から通われている寄宿学校に通  
うことになり、モリーネの生徒は二人になった。

年に数回ある帰省時期になると、坊ちゃまは一目散に屋敷へと帰  
ってくる。

季節が変わるごとに大きくなっていく坊ちゃま。

しかし、相変わらずモリーネを敬い、なんて立派な生徒になった  
のだろう。

自分に子供が居たのならこういう感動を味わうのだろうと感慨に  
ふけていた。段々と大人になっていく成長を喜べるのは嬉しくも  
あるのだが、少しおいていかれたような寂しいという気持ちもあっ  
た。

これから坊ちゃまの世界は段々と広がってくるのだろう。

初めての生徒だからこそ、こんなにさびしく思うのだろうか。

これからアンネリーお嬢様も、そしてその弟君もその日を迎える  
のに。

彼らが大人になり、モリーネが次のお屋敷へと赴く頃にはこんな  
感情にも慣れっこになっているのだろうか。

代わり映えない日々の中で、モリーネは奥様と旦那様の紹介で、  
教区の新任の牧師様にお会いすることになった。

彼は優しく、慎み深く……深い青の瞳で静かに人を見つめる人だ  
った。

彼の側にいると落ち着かない。

それは、モリーネの全てを見透かされているかのようで……。



いい友人でありましょう。

お互いに素晴らしい、モリーネは日々の変化を探すように、教会に事あるごとに訪れた。

季節の祭りごとや慈善事業、バザーの全てに出席した。

モリーネが若くてハンサムな牧師狙いで浅ましい、と噂をするものが居たけれど、当の牧師本人は、モリーネの気持ちを見透かしているので、何も恥じる事は無い。

牧師様は、モリーネの焦燥感を見抜いていたのだ。

仕事にも、何も不満は勿論無いのに。

全てが移り変わり、おいていかれていくような焦燥感。

しかし、自分だけが変われない。

何も変化することの無い、日常から……抜け出したいと思っているモリーネの本音を。

いくつかの季節を越え。

ある天気の良い日に、牧師様が屋敷を訪れた。

庭で子供達が遊ぶ様子を見ながら、東屋で一緒に午後のお茶を飲む。

それは、モリーネにとって緩やかな時間だった。

しかし、その時間はあっさりと崩される。

誰の注意も払われていない。

ある意味、二人つきりになった隙について、牧師様は言った。

旦那様と奥様にはお許しをいただいたのですが……と一言。

その出だしだけで、モリーネは彼が何を言おうとしているのかピ

ンと来る。

でも今更、なぜ？ という気持ちも強い。

初めて紹介されたとき友人で居ようと言ったのに。

それにモリーネは、自分の魅力を痛いほど分かっていて、目の前の牧師様が自分を好きになる理由が思い当たらない。

魅力的な牧師様に、教会を訪れる若い娘はいくらでも居たはずだ。

それになぜ、こんなに魅力の無い自分に――――

モリーネは「考えさせてください」といい、牧師様を残すと東屋を後にして子供達と屋敷に戻る。その日の午後は、坊ちゃまが帰省する予定が入っていた。

変わりたい、と思っていた。

それはこういうことを望んでいたのだろうか。

モリーネは子供達を見ながら、考えること、数日。

全てを見透かすようでいて、見守ってくれる瞳を思い浮かべ、その求婚を受けた。

その返事を聞いた途端。彼の瞳が喜色に染まる。

思いがけない彼の変化に、初めて彼を男性として意識した。

今までは「牧師様」としての尊敬する「人」としてしか意識していなかったのに。

いつも穏やかなその目に火がともったように、求められると動悸が早くなる。

それは不快なものではなくて――――

その途端、彼からつかまれる手が、接吻を落とされる手のひらが……全く違うものに感じた。

彼と居れば自分も変われるような気がする。  
モリーネは心が震えていた。

「先生、お話があるのですが」

その日の夜。

突然坊ちゃまはモリーネの部屋を訪れた。

小さい頃、分からない問題があるとよく質問に来ていた事を思い出して懐かしくなるが。しかし、今や坊ちゃんは立派な大人だ、子供のときとは違う。扉を開けずに、身支度をしてからいつも子供達の勉強を教えている部屋に行きますと答えると、坊ちゃまは驚いたことに強引に部屋に入ってきた。

身支度もしていないモリーネはナイトドレス姿にガウンを羽織るだけの姿で。

こんな姿で、妙齢の男性の前には一度も出た事はないので、いくら昔から知っている坊ちゃまといえど羞恥で赤くなり、非難の言葉を浴びせる。坊ちゃまは悪びれた様子もなく、どちらかというとこちらを責めるように、見つめていた。

「……牧師様に求婚されたようですね」

その言葉にモリーネははっとして振り向くと、坊ちゃまは触れるほど近く……いや、もうモリーネの腕をつかみ、顔も近い。

坊ちゃまが子供の頃は……額で熱を測ったりしたけれど。

久しぶりに近くで見る彼の顔は、知らない男のようだった。

昼間牧師様に触られたときとは、また違った、胸の奥がちりちり

とする感覚。

「どう……答えるんですか？」

「お、お受けしよう——っ！！？」

その返事は聞きたくないとばかりに、坊ちゃまの唇でモリーネの口はふさがれる。

唇を、舌でなぞられるような感覚に、反射的にモリーネはつかまれている手で彼の頬を打った。

彼の頬が赤くなるのをみて、はっと叩いたことを後悔するが、その瞳を見て面食らう。

その瞳は、感情を抑え切れない……紙一重の狂気をはらんでいた。

「約束したはずです、私があのとときの貴女の年を越したとき、私の求婚を考えると」

「そ、それは……」

すっかり忘れていた、遠い日の約束。

「子供の見本となるべき先生が、約束を違えていいとお思いですか、モリーネ？」

モリーネは愕然とした。

そこにはもう、教え子の姿は無い。

一人の男が立っていた。

「私はずっと、その約束の日が来るのを待っていた、のに」

彼を見ているようで……見ていなかった。

彼の向けてくれる分不相応な愛情を敬意に履き違えていた、自分。

もしかしたら、こうなってしまうサインを無意識に避けていたのかもしれない。

自分のことで、精一杯で、彼の心が暗く澱んでしまった事に、彼が切羽詰った今更ながらに気がついた。

坊ちゃまのことを拒否できない。

これは自分の引き起こした、過ちだ。

「なぜ、その日を待たずに、あの男とっ……」

苦しげに言い捨てられる言葉。

彼は呆然とするモリーネの両腕をつかむ。

それは、強い力で……。

この拘束を拒否しないのは、牧師様に対する裏切り行為だ。

でも、振りほどけない。

振りほどくのは、彼にしてしまった自分の罪から無責任に逃げること。

知らずの内に、モリーネは静かに涙を流していた。

目の前の変貌してしまった、「男性」に自分の犯してしまった過ちをどう償えばいいのか分からない。

その涙をみて、しばらく、彼は動きを止めた。

そしてそらさなかった……瞳がそらされる。

「……………すみません、先生」

その一言で、彼はいつもの坊ちゃまに戻ると、静かに部屋から出て行った。

モリーネの心に、二人の男性への罪を残して。

これで、モリーネの懺悔は終わる。

全て告白したモリーネは、すがる様な目で、告解室の窓を見つめる。

そこに居るはずの牧師様に、恥知らずにも助けをすがった。

求婚を受け入れた身でありながら、坊ちゃまの気持ちを拒否できなかった罪。

坊ちゃまの気持ちを気付くことが出来たはずにも関わらず、踏みこじった罪。

だからといって、責任をとって受け入れることもできなかった、罪。

こんなことになって初めて気がついた自分の正直な気持ちを言えなかった罪。

「貴女は誰を愛してるのです？」

「私は……」

モリーネはその名を、恐る恐る口にする。

こんな罪深い自分が求めている名前ではない……けれど、この場所が全てが赦される場所。

「……を、愛しています」

愛しくてたまらない、そう感情の籠ったその声。

その名をいい終わり、しばらくした後、この場所で聞こえるはずも無い声が聞こえる。

「私も、君を愛している」

「！！」

「君の罪は……私が赦すから、だから」

「ぼ、牧師様は！？」

「初めから、私だよ、モリーネ。君をつけていた」

「騙すなんて！」

「でも、もう君の気持ちは聞いてしまった、その事実はまだ消せない」

「だめです、私は……」

そう言って、モリーネは罪の意識から愛しい人から逃げ出そうと、あわてて告解室を出る。が、すでに遅く。出た先には、愛しい人が逃がさないようにと、モリーネを待ち構えていた。

「それは自分で自分を縛っているだけなんだよモリーネ。私はとにかくに許している」

抱きしめられるだけで力が抜けた。

その言葉が、最大の赦しだ。

額にキスをされると、この場所がどこだかモリーネはあわてて思い出し、彼の胸からあわてて逃げようとする。

「神様もこれぐらいならお許しになるさ」

彼のこの言葉で、ぞくりとしてしまう私は変わってしまったのだ  
ろうか。

モリーネは彼の服の裾を握り返した。



嘘か真か。(前書き)

サバの日用、小咄。  
坊ちゃん×使用人。

嘘か真か。

午前中、朝。

開口一番。

私の顔を見るなり、「好きだ、君と結婚したい」と真っ赤になった坊ちゃんから、不意打ち気味にそう言われた。

一瞬、混乱しかけたものの。

ちらりと坊ちゃんの肩越しに見える、カレンダーを見て気が付く。

——ああ今日は例の日だったか。

と、私は納得する。

こんな真っ赤になるほど恥ずかしいなら、もっと別の「嘘」にすればいいのに。

「嘘」だとわかっていても、私の心臓は早鐘を打つ。

そしてよりにもよってなんでこんな「嘘」をつくんだろう。だから、私はこう言った。

「ごめんなさい、坊ちゃん。私は他に好きな人が居るんです」

半分は嘘、そして本当。

「そ、そうか……」

面食らった顔をして、坊ちゃんはそう言って去って行った。

うーん。面白くない切り替えししちゃったかな？  
まるで芸人さんが滑ったときのような白けた顔というか雰囲気だった。

そして、午後。

掃除用具を持った私は、廊下で坊ちゃんとすれ違う。  
すると、思い切り気まずい顔をしてそらされた。

「スベったからって、そんなに避けなくてもいいじゃないですか」  
「……」

「大丈夫ですよ、坊ちゃん。来年がありますから、来年頑張ればいいんです」

「……来年？」

「来年の嘘には、期待してますから！」

「嘘……？」

「ですよーもうちょっと、ソフトな嘘にしていただけると私も切り替えししやすいんですが」

そう言って一礼すると、私は坊ちゃんの横を通り過ぎるはずだった。  
のに。

「……ちょっと待って」

「へ？」

腕を掴まれて、それは出来なかった。面食らう。

「どういう事だ？」

「どういう事だ？　って……エイプリルフルは午前中までですよ？」  
「！！」

一瞬驚いてから、坊ちゃんは耳まで真っ赤になった。

「昨日一晩中悩みぬいていて……今日が何の日か忘れていた」  
そう呟く。

「へーそうなんですか……って。え!?!??」

私は「え」を思い切り叫んでしまった。

だって、今日が何の日か忘れていたという事は……坊ちゃんのあの言葉は「嘘」ではなく「真」

「と、言う事は君の返事は……嘘だったという事だな、とすると」

「……ごめんなさい、坊ちゃん。私は他に好きな人が居るんです。」

裏を返して読み返せば。

プロポーズの返事は「はい、私は貴方の他に好きな人はいません」

満足げに、そう結論付ける、坊ちゃま。

誤解です——いや誤解でもないけれど、誤解です。

幸せな笑みで、そのままぎゅっと強く抱きしめられて、私は——  
そう、口にだせなかった。

## 王子様と女庭師の関係。(前書き)

ある女嫌いの王子様と、身分を隠した女庭師の日常。

## 王子様と女庭師の関係。

「そう、それで貴女は断るといふのかしら？」

算術機をチラつかされて、微笑む王妃様ははっきり言って怖い。  
その算術機が示している金額は、私の家族が楽に三年ほど食べて  
いける金額を示している。

王妃のその様子では、札束で頬を叩いてきそうだった。

いや、私の回答を聞けば指に大きな宝石をつけた手で、はたかれ  
るかもしれない。

とっても、高価な武器だ。

私の名前はステファニアⅡコッツラウル。

コッツラウル家は子爵。本来なら私もお嬢様として暮らしている  
はずなのだが、コッツラウル家は下流貴族の中でも懷事情は底辺も  
底辺の貴族とは名ばかりで、殆ど庶民の生活をしている。

そんな私は、小さい頃に園丁の仕事をしよう見まねで手伝い、そ  
れが転職と思い、本格的に一生を捧げる仕事にした。

昔からうちにお情けで出入りしてくれていた園丁は、実は城へも  
出入りする凄腕の庭師で。

私は一応なけなしの子爵家の体面というやつで、身分を隠し今は  
ステインという名前を名乗って……といっても愛称なので嘘は言っ  
ていないのだが……城の庭師として働いていた。

そんな私が、お金の力で、王妃様から「お願い」されようとして  
いるのは。

——私の息子を誘惑してくれない？

というとんでもない願いだった。

「私の可愛いセオドリックが、女の事を気にして女の名前を聞くのは初めてなのよ!」

「そ、それは……私の事を女として気にしたわけじゃないんですよ、王妃様!」

セオドリック殿下。

この国の第一王位継承者で、銀髪紫眼の”水晶細工の王子様”という異名を持つかなりの美形として知られてる。けれど、それと同じほどに彼の有名な噂は……女嫌いだ。

私は、一か月前の出来事を思い出した。

師匠から一区画任された場所に植え、丹精込めて育てた薔薇。

それがつぼみがつき始め、もう少しで咲くんだった!　とうきうきしていたところ。どこの誰だか知らない男が荒らして怒鳴りつけたら、よく顔を見たら――殿下だったという訳だ。

それほど、私は薔薇しか気にしていなかった。間近でみると、間違えようもなく白銀に輝く長い銀髪を一つに纏め、深い紫の瞳は彫像のように整った顔にはめ込まれた宝石のようだ。背は高く、すらりとしていて、細すぎず……と美辞麗句が私の頭の中のすべての言葉を使っても追いつかない。というほど、目立つ外見だった。

まあ、訳を聞いたら、苦手なご令嬢を避けるために窓から飛び降りるのに必死で、着地した場所が私の丹精込めた薔薇だったという。何とも痛い話だったのだが。因みに、殿下は分厚いマントで保護されて珠のお肌には傷一つなく無事だった。ああ、可哀そうに私のブルームーン（薔薇の名前だ）

その日から、殿下の視線が痛かった。私を見かけると寄ってきて。

はつきりいつて、あの王子が私に寄ってくるのは嫌がらせでからかってくるのだ。

名前も聞かれたけど、名前を知られたら最後、何を調べられるかわかったものじゃない。

私はのりくらりとかわしてきたが、一か月目の今日。とうとう王妃様に呼び出されて、殿下への不敬でもしかして打ち首獄門の刑に処されるのかも……と思っていたが。

それよりもとんでもない事をいわれて混乱してる。

殿下の女嫌いを治してくれ……だなんて！

「……お断りします、殿下にはもっとふさわしい女性がいらっしやる筈です」

「こんなにお金を積まれて、うちの息子に言い寄ってもいいって言ってるのに、うちの息子が不満なの！？ 不細工の癖に！」

確かに。

私はそんなに器量よしじゃない。

器量よしだったら、玉の輿に乗るといふビッグチャンスをもつるために、パーティやら舞踏会やらに出ていただろう。

でも面と向かって言われるのは流石に、傷つく。

「でもお金でそんなことを私が頼まれて近づいたと知ったら、殿下の女嫌いに益々拍車がかかるのではないでしょうか？」

確かにお金はとても魅力的だ。

この算術機に表示されている金額をもらったら、実家の屋敷の雨漏り修理が完璧にできるなど一瞬考えた。けれど。お金でやっている事とやっていけないことはわかっている。一応、子爵令嬢としてのなければしのプライドがあった。



どうかかこのバカげた考えを止めさせようと、必死になった私に、王妃はこう畳みかける。

「いいわ、貴女がお金で動かないというのなら。貴女をクビにするようにロバートに命令しますから」

ロバートというのは私の師匠だ。

「それともステインではなく、ステファニア。貴方の本当の身分を、今日のお茶会の話題に出してもいいのよ？」

その一言で、私は折れた。

一応、ステファニアとしての私は、社交界にドレスやその他諸々かかる費用がなくて出られないのだが。それを隠し、とてつもない大嘘で笑うしかないのだけれど、病弱なので家に籠っているという事になっている。実際の私は、日焼けでそばかすまみれ、そして重い肥料や剪定した樹を運んだりするほど健康体だ。

しかし、そんな嘘がばれれば、うちのなけなしの名誉が地に落ちるだけではなく、また新しい職を探すために苦労しないといけないし、そしてそんな私を好意で雇ってくれた師匠にご迷惑を掛けてしまう。

そして王妃がどこの馬の骨ともわからない女を“公認”で殿下の側に置くわけがない。子爵令嬢という身分がぎりぎりあるから、戯れ相手として許されるということか。

私は、深く深呼吸して考えた。

万が一にも私が女嫌いの殿下を落とせるわけがない……ので万が一にも私が、ふしだらな娘という評判などたないだろう。

ここは適当な事をいって承諾するのがベストだと思う。適当な時期を見計らって、私には無理でした！ といえば、納得されるだろうし。それもちょっと悲しいが。

仕事もあるので自分が出来る範囲で頑張りますので、といってお金をいただくことを辞退して、私は無事王妃の部屋を退出できた。そのころには冷や汗でびっしょりだった。

✱

「殿下……貴方の母君は一体なんなんですか!!」

私は庭園の草をブチブチとむしりながら、また例のごとく寄ってきた殿下に悪態をついた。

私が苛々しているのを感じ取って、なんだか嬉しそうに殿下はしている。

この男、ドS過ぎる。

「母君が、どうかしたのか？」

「貴方が私に興味を持っているようなそぶりをみせるから！王妃様に女を教えてくれってお金を積んで頼まりましたよ！」

「それで、お前はなんと答えたんだ？」

にんまりを笑う。いくら美しい姿をしても、まるで悪魔のようだ。

いや、美しいからこそ、悪魔なんだろうか。

「お断りしたんですが、クビにすると脅されましたんで、適当にはいと答えておきました。その方が殿下にも都合がいいでしょうから、適当なところで私を振ってください」

「そんなに俺にネタばらしをしていいのか？ 母上に言いつけるかもしれないぞ？」

「まあまあ、そんなにステインを脅かさないの、セド」

途中で私をかばってくれるのはシーモンド様。

女性にはとても優しく、殿下とは正反対の外見をしていた。太陽のような明るい黄金の金髪に緑の瞳を持っている。一部の隙もない貴公子ぶりには城の女性にちよつとアレな熱狂的なファンも多い。しかし――シーモンド様のファーストネームはオクタヴィアナ。れっきとした女性だ。男装の令嬢というやつだ。しかしシーモンド様がドレスを着ている姿が想像できない。

「本当に、セドの母上は短絡的だね。一番目は私だったけれど」  
「えっ!？」

「女らしい女性がダメなら、男性の姿をしている女性は？ って事で私が呼ばれたのさ。でも私としては、こんな男より……ステインのような可憐な女性とお近づきになりたいな。前から思っていたんだよ」

「シ、シーモンド様っ!!」  
「オヴィー、と。愛称で呼んでほしい」

雑草を抜いている手に、そつと手を重ねられる。

そういえば、午前中の王妃様の一件であまりの動揺ぶりに手袋をするのを忘れていた。シーモンド様の美しい手と比べて自分の荒れ果てた手に恥ずかしくなって、手を組んで胸に引き寄せる。

「その美しく可憐な手が傷だらけで痛々しいね、後でハンドクリームでも届けさせよう」

「そ、そんなとんでもないっ……!」

シーモンド様は礼儀作法も完璧で――私なんか一介の庭師とされているはずなのに、レディとして対応してくれる。ので、調子が狂うというか、てれてしまうというか、恥ずかしい。相手は女性なのに。

「おい、お前らがいい雰囲気になってどうするんだ？」

「え、あ、すみません。殿下。存在をすっかり忘れていました」

同じく美しい姿をした、殿下ではあるが、シーモンド様のようにドキドキしないのは、残念ながら中身が……。

そんなことを考えているのが、殿下には丸わりの様で。

「俺にそんなことを言えるのは、お前ぐらいだよ、ステイン」

「いえ、だって。今更取り繕ったって……出会いがあれですし、殿下」

「そうだな、今まで女に叱られることも無視されることもなかったから新鮮だったな」

あ、語尾が心なしか怪しい。

殿下のいじめっ子スイッチを入れてしまった。気がする。

「とにかく、私が殿下にお話したと言うことがわかれば第三、第四の刺客が送り込まれてきますので、殿下の方が困ったことになるのでは、それよりも私に適当に引っ掛かったふりをして王妃さまの気をそらし、自由を満喫すればよろしいじゃないですか。そして私も職を失う事なく安泰です」

「……そんなに職を失うのは嫌なのか」

「当たり前ですよ殿下。うちは貧乏なんです。たの兄弟も働いてますが私の稼ぎも入れてかつかつなんです」

「なのに……お前は金はもらわなかったのか？」

「出来もしないことでお金なんて頂けませんよ。それに……少し、殿下が女嫌いになる気持ちがありました」

「分かってくれて嬉しいよ、ステイン」

殿下は、別に嬉しくもなんともなさそうに、無表情でそう言った。「でも、こんなに凛々しく素敵なシーモンド様でも駄目だなんて。一体どんな女性ならいいんですか？」

一応、王妃さまの手前基本的な事ぐらいいはやっておこうと思うというのが半分。これで好みの女性が聞ければ、その女性とくっつけ

るようにと王妃さまに言ってしまったえば、こんな煩わしい事から手を引けるというのが半分。

って、もう全部の理由が殿下を自分の生活から排除したいという一択になってるけど。

「……………そうだな。今の所俺の中ではお前が一番らしい」

流石に見抜かれていたみたいで、殿下に答えをはぐらかされる。

「ま、まあこの広い世の中。まだみぬご令嬢は多いはずですから、きつと殿下の気に入るお嬢さんぐらい見つかりますよ、幸いにも殿下は美形ですし、スタートから有利です！」

「そういう割には、お前はオヴィーの方が好きなんだろう」

「え、そうですけど。あ、そうですね、お会いできたとしても殿下を好きになってくださるという保証はないですね……………うーん困ったな」

「一生困っている」

やや不機嫌に陛下はマントを翻し去っていくこうとする。普通の人間なら芝居がかったその行動も優雅過ぎて見惚れる。流石は王族。それを我に返って私は呼び止めた。

「殿下、それでどうされますか？　王妃様には……………」

「わかった。お前に誑たぶらかされて、俺はお前にメロメロだとも申し伝えておく」

「なっ！！　何もそこまでは……………」

「覚悟しろ」

そう言って下働きの人間には通れない、表廊下に去っていった。追い掛けたくても追い掛けられない。私は声にならないうめき声をあげた。

——もし本当に陛下が王妃様にそんなことを言ってしまったら、だ。とてもまずいことになる。

私が本当にただの平民で園丁であるならば、いい。ただの遊びとして同じ人間とは見てもらえず、見て見ぬふりされるだろう。しかし本来の私は一応子爵令嬢だ、それを王妃様は分かっている。無理矢理側室として召し抱えられる事になりかねない。真っ青になっていると、慰めるようにオヴィー様がいった。

「本当に……セドは素直じゃないな」

「そうですか？ はっきりしつかりと私に厭味いながら去って行きましたけど？」

そう。

あの捨てぜりふは厭味だ……嫌みにきまつてる。本当に王妃さまに言う訳がない。

「ああいや。あれでもセドは君に甘えているんだよ」

「え？ 殿下が」

殿下は御年19歳。私は16歳……歳下の小娘に厭味というかパワハラの嫌がらせしていくのが甘えてる？ 嫌がらせ以外何物とも思えないけれど。

甘えるうえでの冗談にしても、もっと平和な話題をだしてほしい。

「何故か君はお喋りにさせるから、セドも気にせず本音で喋り合え

るんだろうね」

「いえそれは……それを言うのならシーモンド様……あ、オヴィー様のほうがお話しやすいかと」

家名で呼ぼうとして、シーモンド様に首を振られて愛称で言い直す。何といてもシーモンド様じゃなかったオヴィー様は、女性で唯一と言っているいい対等な態度を、殿下に取ってもらっているのだ。「いや。私とセドはあくまでも……いや、勝手に喋り過ぎたな。彼の居ないところで彼の気持ちを代弁するのも野暮な事だ」

「……」

本当に女性にしておくには惜しい程の見事な紳士ぶりです。

「それにしてもステインには慕う方は居ないのか？ それとも許嫁でも？」

「えっ！ 私ですか！？ いえっ居ませんよそんな方。うちはどうしても貧乏なので、花より団子といった状態です。流石にそろそろ一番上の兄上には結婚して欲しいのですが……うちなんかに来てくださる奇特な方がいないのですから」

「ふーんそうなのか。一度お会いして見たいものだ」

「いえ、オヴィー様にお見せできるような兄ではないのです」

兄上を思い浮かべてみるが、本当にオヴィー様と同じ貴族とは思えない程、領地の小作人達に溶け込みすぎて働いている。

生粋な貴族のオヴィーさまが見たら、さぞ粗野な兄上にびっくりする事だろう。

でもステインには、大事で大好きな兄上だけでも。

「では私もそろそろ失礼するよ仕事の邪魔をしては悪いのでね」

「いいえ、オヴィー様ならいつでも歓迎いたします。何のお構いも

出来ませんが」

雑草を抜く。といった単純作業の時は、むしろ話相手がいる方がうれしい。

オヴィー様はそのところを弁えてくださるのでいいのだが、殿下は作業の邪魔を度々しては相手をしないと不機嫌になるので歓迎できない。こっちは仕事中文のに殿下としての役目をサボって息抜きにくる人間の相手なんてしてられない。というか忙しいにも関わらずちよくちよくくるのは、そんなに私をからかって憂さ晴らしをしたいのかと、人格を疑うレベルだ。

私のそんな気持ちと「オヴィー様なら」というセリフからそれを感じとったみたいでオヴィー様は苦笑する。

「本当に君達の未来は多難だね」

殿下が私に飽きて下されば、それだけでお互いの未来はバラ色なのにと、私はため息を吐いた。

——ああ、ダメだ。溜息なんか吐いてると、幸せが逃げてしまう。

幸せなんかとつくの昔に逃げているということには私は目をつぶった。



## こじれる女庭師の秘密。

殿下が少しでも賢ければ、藪をつついて蛇を出すような選択肢を選ばないとは思っていても、もしかしたら本当に言うかもしれないという不安があつて、私は数日びくびく暮らしていた。

が、王妃様のお召はなかった。

どうやら殿下は王妃様に本当には言わなかったらしい。

そして、殿下の姿も……あの日から見当たらない。

私は心の平穏を取り戻し、いつも日課の庭の草むしりと任せてもらった木の剪定をしていると、目にとっても見覚えのある姿が映った。

「兄上どうしてここに?! この時期はイルマの家の収穫時期では?」

周囲を見回し誰も居ない事を確かめてから、私は兄上を人から見えない茂みに引っ張りこんで再開の抱擁とキスをした。

久しぶりの兄上の厚みのある感触に私は安心する。この前のお休み以来だから半年ぶりだろうか。手紙のやり取りをしているとはいへど、実物の安心感にはかなわない。農作業に従事しているがっちりとした逞しい体躯に焼けた小麦色の肌……お日様の匂いがする。

「いや、実は王妃さまからの謁見の要請があつてな、この前ヘンリーナイト郷にお渡ししたハンカチがどうやらお気に召したようで献上するようにと」

「王妃様が?」

本当にそれだけな……はすがない。

けれど、喜んでいる兄上には心配をかけたくなって私は隠した。

家族には心配かけたくなくて、定期的に書く手紙からは意図的に、殿下との出来事は排除している。

「これで王妃さま御用達という箔が付けば少しは家計も楽になるだろう」

うちの領地ははっきり言って狭い。

作物を育てたり家畜を飼ったり出来る範囲はさらに狭い。

それでもなにか特産品をと考えてた末に、真面目な働き手は沢山いるので。前から特産品としてある織物に加えて特殊な方法で染めた糸で、複雑な刺繍をするという事を考えたのは兄上だった。その複雑な模様の為に生産数は少なく、価格も抑えても割高になってしまったため、市場には流通していない。もし王妃様御用達という箔がつけば、希少価値プラス付加価値でもっと高値で売っても納得してもらえることだろう。

兄上は筋骨隆々な体型と顔をしているが、我が家では一番のお洒落さんだ。男性の方の服装は布地にはあまり流行はないらしく、ポイントになるのは形と刺繍だ。今日の謁見の服も父上のお下がり、布を絶妙に継ぎ足し流行の型に仕上げている。しかも兄上直々の手で。

兄上は特産品を宣伝する事を考えて無理してやって来たのか、と私は納得しつつ。王妃様の考えが計り知れない。一瞬側室にどの通達かと考えたが、それならば兄上ではなく父上がくるだろう。

「それよりもステイン。元氣そうでよかったよ」

「？」

「手紙では何か隠しているようだったからなあ」

さすが長年の付き合いであり、兄上には手紙の微妙な変化を感じ

取ったようだ。

「……とにかく、誰かに見られると、面倒な事になります兄上」

「あ、ああ。そうだったな」

「ですから仕事終わりに」

「ああ」

別れの抱擁を手早く済ませる私の視線の端に微かに見えたのは、まばゆいばかりの……銀色。

しまった！　　と思って兄上からさっと身体を離したのも後の祭。バッチリと殿下に見られてた……というか会話内容も聞かれていたかもしれない。

殿下にばれたらどんな事になるのかと。私の方を向いているためどこと無く不機嫌な顔をしている殿下に気がついていない呑気な兄上を無理矢理追いやって、殿下が近づいてくるのをまった。

殿下は優雅なあしどりだけれども、不機嫌さは一歩足を踏み出すごとにびしびしと感じ取れる。私の本当の身分の事を知ったので怒っているんだろう。

——しかし、殿下の口から漏れた一言は私の予想の範囲外だった。

「仕事中に隠れて逢い引きとは……お前もそこいらの女と変わらないという事か」

「……は？」

「しかもこんな茂みの中で何をしていたのやら」

「はああああ？！」

「とぼけるな。見ていたんだ」

殿下の言いたい事が、頭をめぐりめぐってからようやく分かって私は叫ぶ。

「な、なんて言うこと言うんですかっ!? エロ殿下!! 最っ低ですっ……あ、あれは兄ですっ。……いえ、兄のように思ってる前の仕事場の家の坊ちゃんです」

と、言うようにと。あらかじめ打ち合わせしてあった理由を並べ立てる。

まあ実家でも庭仕事は私の担当なのだから、嘘は言っていない。

「あの方の家は、一般人とでも普通に付き合ってるんですよ。けどここの人達は私たちが親しくするだけでうろんな眼で見てくるから隠れていただけです」

案の上。信じられないと言った疑わしげな眼で、殿下が見ている。

「ほら殿下だって、今私達の関係を勘ぐって来たじゃないですか!」  
「それは場所が場所だったからだ。男と茂みにいる危険性を考えないのか、何故警戒心が足りないんだ?」

「来い」と言われて。私は殿下に茂みの中に誘い込まれたので、確かに彼と口論している所を誰かに見られては大変だと思い、大人しく殿下とまた茂みの中に入った。

そして殿下は顔を息がかかるほど近づける……間近で見ても粗も見えず……肌がきめ細かいし、近くで見ると瞳の紫が本当に宝石のような色をしているご尊顔は美しいままだけれど。はっきりいってあまり仲の良くない人間に、必要以上に近づいて来られて、私は不愉快だった。落ち着かないのは不快だからだ。そうに決まっている。

「知り合いだからといって、こうやって男と茂みにいる理由にはならないだろう。危険性を考えないのか?」

「私だって。誰とでも茂みに隠れたりするような事なんてしませんよ？ 信頼してる人間か……そういった相手じゃないと、行こうという気はしません」

真実だった。

貴族のお戯れで、手を付けられたら泣き寝入りするしかない。相手は私を平民とと思っているのでなおさらだ。そんな危険を冒すほど私は愚かではない。

「なら……俺とこうしているのは信頼してるということか？」

「いいえ」

「なら、どういう事だ？」

無表情になっている殿下は、内心私を汚らわしいとも思っているのだろう。美しい眉がひくひくと動いている。もう一つの可能性だと勘違いされていていそうなので、私は言葉を慌てて重ねる。

「だって殿下は女嫌いじゃないですか！ 警戒するも信頼もなにもそれ以前の問題ですよ。この国で一番安全な男性じゃ無いですか！」

暗に私が殿下を”そういったお相手”と考えていると勘違いされたから、こう言ったのに。殿下は益々眉をひそめた。近いので顔の微妙な動きがいつもよりわかってしまう。

何が殿下の気に障ることなのか解らない。めんどくさ……いや、難しい人だ。また見えない殿下の不機嫌のシッポを踏まないように、私は逃げるが勝ちだと思った。

「では、仕事がありますので、これで」

膝をおり。早足で去ろうとすると腕を捕まれた。思わぬ方向からの力で引っ張られて痛いのと、あまりの無作法さに反射的に睨んで

しまうのは仕方がない。

「痛いです……は、放してください」

「なら、今日の仕事が終わったら俺と会え」

「無理です。先約が……」

これ以上殿下の機嫌を損ねないようにと、こっちが気を使っているというのに。

何でそんなに不機嫌になる私なんかと会いたいのか。

——ああそういうえば、私達は王妃様に……と考えて既成事実を作りたいのかと理解した。

「命令だ」

「……。分かりましたよ」

そう言うのと、ねじり上げられたように不自然な力が入っていた腕がやっと放される。

久々の兄上との語らいを潰されて私は渋い顔だった。

王妃様が何を企んでいたのかも聞きたかったのに。

王城には何日滞在の予定だろうか？　きっと兄上のことだから、師匠に言付けしてくれるだろうけれど。

「殿下」

兄上との時間を潰されて、私は無言の抗議で身嗜みも整えず。仕事終わりの恰好のまま殿下を約束の場所で待っていた。はつきりいって、土いじりをした後なので小汚い恰好だ。早く家に帰って水浴びと洗濯してさっぱりしたい。

案の定。殿下は私の恰好をみて不機嫌だったが、急に予定を狂わされて命令されたんだからこっちのほうが怒りたいと言う態度を私は崩さない。

「それで……わざわざ一体何のご用でしょうか？」

「本当に。あの貧乏子爵の息子とはなんでもないんだな？」

いつの間にやら兄上を調べている。

しかし調べられ私の事が露見する危険性よりも、私は殿下の言動を許せるものではなく、怒りを出来るだけ抑えて、抗議した。

「……何かあるわけ無いですが。あに……彼を馬鹿にするのは止めてください」

流石に身内の悪口は聞きたくなかった。大好きな兄上なら尚更だ。

「本当になんでもないんだな？」

二度も念を押すなんて……と気がついて。やっと殿下が言いたいことが思い当たった。

「王妃様の事をご心配ですか？」

殿下と私の関係に第三の男が出現するなんて、ややこしいことになりたくないのか。それで探ってるのか。

「彼とどうにかなるなんて事は神に誓って絶対ありえません。」

——兄妹だし。

とは言えないが、絶対ありえないと言い切る私の態度に、絶対な  
んてありえないという不満げな態度だった。

「本当なのか」

「はい。殿下とのカモフラージュは続けてくださっても、何の問題  
もありません」

「ならよかった。ついて来い」

「え」

「その小汚い恰好も、むしろ好都合かもしれない」

「なにがですか」

とても嫌な予感がする。

お芝居を滞りなく続けられると納得してくれたのなら帰りたいの  
に。殿下は後ずさる私の手を握った。「きゃ」と女らしい悲鳴を私  
はついあげてしまう。

「お前が……腕は嫌だと言ったんだぞ？」

さっき腕が痛いと言ったから、殿下なりに反省してくれたらしい。  
けれど手を握られるのは、腕をつかまれるのとは違った意味で嫌な  
気分だ。

「ちよっと、お待ち下さい殿下！」

嫌な予感は当たった。殿下に引っ張られながら私は青ざめる。殿  
下は私を連れて表廊下を通ろうとしているようだった。こんな小汚  
い恰好をした……しかも殿下が「女」をひっぱっていると、沢山の  
人の眼に留まることになる。なのに思いきり拒否しても、殿下の手  
ですっぽりと包まれた右手によって、ぐいぐいと表廊下の方へ連れ  
ていかれる。

——最悪だ。



抵抗も虚しく、私はきらびやかな人達の好奇の的になった。  
考えたくない、後が恐い。

そして私が連れていかれたのは王妃様の部屋だった。

私の汚い恰好を見て入室を拒否する従僕を押し切って、入室する。

「一体どうしたというの?!」

王妃様は、お気に入りの取り巻きのご婦人達と流行の物についての会話をしていた。今日は布の商人が来ていたらしく、広い室内に所せましと色とりどりの極上の反物が敷き詰められている。

そんなお楽しみ中に、殿下はともかく闖入者連れで来たものだから王妃様は眉をひそめた。

「母上大事な話があります」

「……」

王妃様はちらりと私を見た。

明らかにやり過ぎだといった、不愉快を表す眼だ。

取り巻きのご婦人達も興味津々といったり、どうみてもこの場に相応しくない私に、軽蔑の眼を向けている。そして、殿下が握られた手の方により強い視線が向けられていた。

それもそうだろう、女嫌いの殿下が女の手を握っているなんて、  
”ありえない”事だからだ。

「俺は彼女を正妃にしたい」

一応この場にいた皆様も私も殿下が、何を言ったのか聞こえていたが、理解できなかった。

理解して静寂が一気にざわめいた。

「な、ななな何言ってるんですかっ……でんかつ!!」

「何を言うの、この子は。おほほ」

流石に王妃様だけは、動揺を一瞬で立て直す。

「俺は彼女じゃなければ、子供を作れる気がしません」

私はその恐るべき内容に、殿下の横顔を見つめた。

近くで見ているからわかった。殿下はこの状況を楽しんでいる。表情は、まるで身分違いの恋に身を焦がし、真剣に母親を説き伏せる……物語のような表情だが、目が愉快的な色を宿している。

王妃様を困らせてやろうそれが成功してるといった、そういう色だ。

でもこの場で一番困っているのは私だった。

全くそういった親子の確執に私を巻き込まないでほしい。

殿下は私が庶民で、殿下の正妃になる事どころか、正式な側室でさえも絶対許される事では無いと思っているから、言うだけ無駄、断られる事前提で言っているのだ。そして自分は安全な所でその通らない問題を通すふりをして王妃様を困らせるだけ困らせたいと……ドSだ。

——でも、そうじゃない。

私は自分が事なかれ主義だったのを、痛い程反省した。

王妃様に頼まれた時に職を失おうとも、きっぱりはつきりさっぱりと殿下との縁を切っているべきだったのだ。でももう遅い。そして殿下もこの嘘の結果が大事になる事なんて露にも思っていないだろう。

「そうなの。この娘でないと無理だと、貴方は言うのね……だった  
ら側室なら許しましょう」

その言葉に、それさえも許されないと思っていただろう殿下は、  
少し驚いたようで眼が動く。

「いいえ、母上。俺は彼女でなければ娶れません」

軌道修正。

これだったら絶対無理だと思ってか、殿下は暗に王妃として迎え  
たいと言い出した。

めっそももないです！　　というかこっちからお断りです。私はあ  
わてて王妃様にアピールする。

「王妃様私のような低い身分の女が……」

「御黙りなさいな、もう貴方が決める事ではないのですよ」

このメス猫！！　と陰悪が王妃様から感じ取れる。

もとはと言えば。誘惑してくれて言ったのは王妃様なのに身勝  
手すぎる……とは流石に私は言えない。

「殿下、このように言われますと、王妃様は本当に再考されてしま  
いますよ？」

私が決める事ではないのなら、今度は殿下にこのまま嘘を続ける  
とやばいとアプローチするまでだ。じっと、上目づかいで殿下を見  
つめる。この状況がやばいと気が付け！と目に力を込めて。

すると、殿下は何をトチくるったのか私をギュッと、抱きしめて  
……。

私は抱擁から顔を上げた殿下が、その次に何をしでかそうとしているのか本能的に感じ取って「ぐきっ」と鈍い音がしそうなほど、殿下の頭を両手でつかんで私の顔から全力でそらさせた。

「今更恥じらう仲でも無いだろうステイン」

そういわれてパツと反射的に手を離してしまうと、その隙をぬうように殿下は私の額にキスをする。

「！！」

あまりにも自然な動作。傍目で見ると、私達二人がまるでいつもこんな痴話喧嘩をしているかのごとく写っていただろう。女嫌いじゃ無かったんですか殿下！と叫ぶ余裕もないほどに、私は真っ赤になって言葉を失った。

そんな私達を見て王妃様の取り巻きは、ショックのあまり更に固まり、王妃様は深い深いため息をついて一言。

「そのような動かぬ証拠をみせられては……本当に。貴方達二人の結婚を認めるしかないよね」

え？

王妃様の眼から私をさげすむこのメス猫！といった色が消え去り。純粹な驚きから諦めに変わった。

私はパニックに陥る。

なんで、今の行動で……王妃様は納得するの！？

こんなに手慣れてるなら殿下、より取り見取りですよ！ と言いたいの先程の殿下に額にされた……行為の衝撃で私は口をパクパクさせることしかできない。

そして結婚の許しが出たというのに……本当はそんなつもりはな

いと慌てるどころか、面白そうな眼をしたままの殿下は、一体何を考えているのか。いや、この先の事なんて何も考えていないのかもしれない。

王妃様の驚く顔が見れたんだから、もうこんな茶番は切り上げてください殿下！ と眼だけで訴える。

「この女なら世継ぎが望める……というのならいたしかたがありません。しかし最低でも一人は男児を授からないかぎりには正妃ではなく愛妾として迎え入れるのを許しましょう。それ以上は許しません」

「分かりました、早く孫の顔をお見せできるように励みますよ」

いやいやいや！ 何言ってるんですか！ 殿下っ……！！??

周りのみんなは「まあ」と上品に扇で顔を隠しながら赤くなっているのに対して、私は青くなる。いや赤紫色をしているに違いない。

「コッツラウル子爵令嬢。レディ・ステファニアとの正式な婚約を認めましょう」

その言葉で息子に意趣返したと、満足げな様子の王妃様……。

やっとその言葉を聞いて殿下は心底驚いた顔をして私の顔をみる。

それもそうだろう、ただの庶民で園丁だと思っていた女が、実は貴族の子女だったのだから。

私はそんな殿下を恨めしく睨みつけた。

## **T r i c k   o r   t r i c k (前書き)**

ハロウインの日用、小咄。

旦那様と幼女：そして執事。微恋愛。

## Trick or trick

「ハッピーハロウィン！というわけで、旦那様トリックおあートリートメント！」

わたしは旦那様の部屋の扉を思い切りよく開けると、こう叫びました。

そしていつもながら不機嫌な顔でわたしをニラミつける……それさえなければ意外とカッコイイ気がします……旦那様に負けじと両手を差し出します。

「何だその手は？」

「何だ。ってハロウィンですよ？ ふふ、子供はお菓子をくれなきゃイタズラするぞの日なのです！」

「お前……それを言うなら。いや、いい。で、何で俺がお前にくれてやらねばならんのだ」

眉間のシワを更に深くして、そしてわざとらしく大きくため息を付く旦那様。

この子供めが、うんざりだ……と言いたいのでしょう。でもわたしは紛れも無く子供なので、そういうわれても問題ないのです。

ええ、旦那様に子供扱いされるのはちよっぴり悔しいですが、問題ないのです。

「ハロウィンは子供がこの呪文を大人に言えばお菓子を無条件にもらえる日なんですよ！ 実際に皆さんくれました！」

そう言って、わたしはポケットいっぱいいただいたお菓子を旦那様に見せびらかします。

見せびらかすだけで旦那様にはあげませんよ！

わたしが貰った、大事で大好きなお菓子たちです！

「お前は普段からいつも、屋敷の皆に菓子を貰ってるだろう」

——あいつらお前を甘やかし過ぎる。

と、誰ともなく旦那様は呟きます。

独り言多いですよ。

もしや旦那様、お友達少なそうですから、壁に話しかけたりしてるんでしょうか？

「……ともかく。俺はお前にやる菓子などない」

「そんな旦那様。オトナげないです。子供みたいな意地悪しないでくださいよ。というか、旦那様の方が子供です」

「いや。事実を言っているだけだ」

そう言う旦那様は視線をわたしから外して、一瞬、ある方向を見つめます。その先をたどると、棚です。ここですか、旦那様のお菓子の隠し先は！ わたしはすかさずガサ入れると、そこにはどうみても晩酌用のスルメイカやら……のおつまみしかないのです。

旦那様親父クサイです。と言ったら最後怒られるのは分かっていたので、賢いわたしは言いません。代わりに抗議でもでも駄々っ子ですっ！

「甘いお菓子じゃなきゃイヤです！」

「ほらな、だからいっただろう。お前にやる菓子などないと」



「お菓子がなければ、イタズラしますよ！」

「……ふん。まあいいならばやってみろ。甘んじて菓子がなかった罰を受けてやる」

「え」

「さあ」

そう言って旦那様は顔は更に不機嫌に怖く、しかし体は手を広げてバチコイな受け入れ体制をとってくれました。

……大変です。

正直、お菓子がもらえる事が当たり前だと思っていたので、イタズラなんて考えてもみませんでした。イタズラするぞなんて、口先だけの様式美というやつなのです。

この前、旦那様の書斎のゴミからは賞味期限切れのお菓子を発見しましたから。旦那様はこんな怖い顔をして隠れ甘党。ストックは腐らせるほど持っているとはかり思っていました。賞味期限の切れたお菓子といえど、とても美味しそうで。ゴミ箱に無造作につっこんでいなければ、わたしうっかり食べてしまうところでした。なのに今日もってないなんて、なんてバッドタイミング。

「後で納めてくれてもいいのですよ、旦那様？ 厨房のベンは後でシフォンケーキを届けてくれるって……」

「……………」

旦那様の無言の圧力が、目が怖いです。

ここは気を取り直して。

大事な時に持っていない旦那様が悪いので、わたしはイタズラをしなければなりません。こんな思いやりのない旦那様に、イタズラやりすぎると大変な事になりそうなので、わたしはよく考えます。そ

うここは慎重に考えなければ、旦那様に逆恨みされるのです。

……うーん。

旦那様に笑って許してもらえそうな嫌がらせ……もとい、イタズラ。

旦那様の笑顔なんて想像するのは無理ですが。  
と、考えてわたしは閃きました！

「ここはオーソドックスに、くすぐりの刑なのです！」

「まあ、いいだろう」

イタズラをされる方が偉そうなのは、なぜなのでしょう？  
答え。

それは旦那様だから仕方ないのです。

「では、こちょこちょこちょこちょ……」

気分を盛り上げるために、口でも言います。

まず手始めは脇腹です。

しかし、わたしがこんなに頑張っているのにも関わらず、旦那様の顔色は全く変わりません。むしろはりきって旦那様の弱いところを探している、わたしの方が疲れてきました。だんだん息が……苦しく、手も痛いです。

……数分後。

「こ、今回はこのへんで、勘弁してあげるのです！」

——降参です。

というかお菓子がないのなら、こんなところに長居するものではありません。わたしは旦那様に挨拶をして部屋から出ていこうとすると、旦那様に呼び止められました。

「dolcetto o scherzetto」

旦那様はそれはそれは見事な発音で言ったので、初めわたしは何を言われたのかわかりませんでした。

しかし、偉そうに右手を伸ばして。

「ほお、俺にはないというのか？」

と意味ありげに言われれば、なんといったのかはもう分かりきったものです。

「ありませんよ、今日は子供がお菓子をもらう日なのですよ？」

「お前が言ったんだぞ？　俺は子供らしいからな、もらう権利はある」

何を言ってるのでしょうか、このダメな大人は！

しかし、そういったのは紛れもなく自分です。

わたしは自分の言葉に責任を持たなければなりません。でも持っているお菓子と言えば、今日の戦利品です。旦那様に分けてあげるわけにはいかないのです！　これは全部わたしの物です！

口に出さなくてもわたしがぎゅっと、スカートの裾をつかんでいるままなのを見て、旦那様はわたしがお菓子を渡したくないのを読み取ったようです。

「ほう……なら仕返してやる。横腹をかせ」

「それでもできません。わたしの弱点です！　延期です延期にしてくださいっ出世払いでお願いします！　旦那様」

必死になってお願いするわたしに向かって、旦那様は愉快そうな瞳を向けました。口許も微かに上がってます。

「ば、バカにしています！！ ひどいです。こっちはどうしても不愉快なのです。」

「そうだな、お前が俺の妻になる頃には返してもらおうとするか」  
「な、そんなにはお待たせしません！」

やっぱりバカにしています！

わたしは五年後には旦那様の奥様になるので、婚約者としてお屋敷に遊びにきてますが。

そこまで長い間逃げ続けられると思われているのは侮辱なのです。

旦那様とギリギリとにらみ合っていると。

「ああ、旦那様のところにいたんですか、コルネーリア様」

その声に集中力が切れて振り返ると。このお屋敷に勤めて20年の大ベテラン執事さんが、いつの間に部屋に入ってきたのでしょうか、わたしの背後にいて穏やかに話しかけてきました。

「どうした？」

「ああ、旦那様。ご婚約者様との大事なお時間を邪魔するのは心苦しいのですが、厨房のベンがコルネーリア様を探しておりまして」

「……別に、邪魔なのはこの娘の方だ」

「左様でございますか、ならばよろしかった、ではお借りしても？」

「……勝手にしろ。おい、コルネーリア」

「何ですか？ 旦那様」

「イタズラを仕掛けるのは俺だけにしておけ。屋敷の使用人が辞められても困るからな」

「皆さんは旦那様のようにお菓子もくれない意地悪さんではないので、いたずらなんかしませんっ！」

私は心外な！ と。ぷりぷりおこりながら旦那様にアツカンベーすると、部屋から飛び出しました。

本当に旦那様は意地悪です！ いじめっ子です。レディの扱い方をわきまえてません。

「では、コルネーリア様。一緒に来ていただけますか？」

このおうちには未来のわたしのおうちになるはずなのですが、何度遊びに来てもあまりにも広すぎて、迷ってしまいそうなのです。だからベンの所に行くにも、案内してもらわなければ、辿り着けません。このお屋敷の女主人になったら自分の家で遭難することだけは避けたいです。が大丈夫でしょうか。と今から心配だったりします。ひつじさんはそんなわたしの不安を汲み取って、道案内をさりげなくしてくれます。わたしが迷うからとは一言も言いません。さすが勤続20年のプロです。レディの扱いをわかってます。旦那さまとは大違いです。

わたしは案内されて長い長い廊下をガシガシと歩いて行きます。分厚い絨毯がふわふわと怒りを吸収してくれます。

「ひつじさん、ひつじさん！」

「はい、何ですか？ コルネーリア様」

ひつじさんは、わたしの方をみてニツコリと笑ってくれます。といっても、ひつじさんは旦那様とは違って、いつもにこにこしているお爺さんなのでほのぼのしてしまいます。わたしは、ひつじさんにもあの魔法の言葉を唱えてみました。

「とりつくおあーとりいと？」

「？」

ひつじさんのにこやかな顔が、少し困ったような顔をします。そして、私に視線を合わせるようにかがみました。

「コルネーリア様、誠に大変申し上げにくいお話なのですが、聞いていただけますか？」

「はい、なんですか？」

「ハロウィンは、十月三十一日の晩の事なのですよ」

わたしはびっくりしました。

十月三十一日というと、とっくの昔に終わってます。ということ今日はハロウィンではないのです。

なのに今日わたしは……そう考えると、恥ずかしさとそれに付き合ってくれたお屋敷のみなさんに申し訳なさからいたたまれなくなってきました。涙がこみあげてきます。

しつじさんはそんなダメなわたしの頭を、ほんわりと優しくなでてくれました。

「でもこんな可愛くて小さなお客様ならいつだって、お菓子を差しあげてしまいたくなるものなのですよ、ですから笑ってください、小さな姫君」

「……は、はいなのです！ みなさんにお礼とごめんなさいを言えます！」

まずはワガママを言ったせいで、ケーキを作らせてしまったベンからあやまらなくては！

「私もお供しても？」

「もちろんなのです！　ついてきてくれますか？」

「ええ、その後に皆でティータイムと参りましょう」

ひつじさんはいたずらっぽく笑いました。

じんわり、と。いたたまれなかったわたしの心が、温まってきた。  
す。

——もちろん旦那様の事は最後の最後の後回しで、のけ者なので  
す。

お茶になんかよんであげません！

追加。

ある執事の業務報告書。

それにしても未来の奥様の思い間違いと言いますと。とても可愛らしいもので、訂正するのは心苦しかったのですが。聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥と申します。これが旦那様であれば、男子だんしは恥をかいて乗り越えてこそ一人前の紳士となるので、そのままにしているのも楽し……いや、獅子は我が子を千尋の谷に突き落とすと

申します。そうそうこの格言、獅子が住むような草原には谷などどこにあるのかと思ったことが有りましたが、よくよく調べてみると、獅子とは伝説の霊獣のことだそうで麒麟と同じような間違いですね。……と、脱線してしまいました。

流石はコルネーリア様です、指摘されたと開き直ったり、誤魔化したり……私に八つ当たりなどもせず。落ち込みはしましたが、すぐさま屋敷の皆に謝罪しにいくという、立派な行いをされました。上に立つ者、下の者には立派な立ち振る舞いを求められます。そうでなければいけません。

あ、そうそう、「ひつじ」はいいのです。

ある意味親愛の証のあだ名だと自負しておりますので。

——そういえば、旦那様はお菓子を買って込んでもらいましたね、甘いものは好きではないのに。

旦那様の名誉のため……というよりは、少し素直になるために努力していただかないと、これから本当にお嬢様を奥様にお迎えした時に、よりよい夫婦生活が送れそうにもないのは困ったものです。旦那様よりもお嬢様に年の近い、ベンを敵視している場合ではないと思うのですが。

……という訳で、私はこの件に関しては口を噤ませていただく所存でございます。



## 世界にさよならを告げる前日の裏話（前書き）

世界を救った巫女の報われない裏話。  
悲恋、片思い。永遠の別れ。

## 世界にさよならを告げる前日の裏話

世界が平和になった日。

宴の主賓でもある世界を救った巫女は、王城の宴の喧騒から隠れるように、物見櫓で静かにたたずんでいた男のもとへとやってきた。長い黒髪が風でなびく、まるで夜に溶け込むように。

「明日、お前は本当に元の世界に帰るのか？」

しばらくは無言だった男の声を聞いて、この世界では珍しい神秘的な黒目を持つ少女が笑顔で振り向いた。

「うん、そうじゃなかったら……ユーリンが困るもんね」  
「……………」

「ははっ、馬鹿だと思ってるでしょ？ ……でも、いいんだ」  
「お前は本当に馬鹿だな」

男は何度この少女に馬鹿だと言っただろうか。

でも、今の馬鹿はまるで囁くように、願いのように……本来の意味とは違った響きがある。

彼は馬鹿だと言わざる得ないほど彼女の事をよく知っていた。そうよく知っている……彼女が知らない真実までも。

少女はこの国に召喚された巫女だ。

異世界から召喚されるその『役割』は世界の浄化。

世界が汚れた時に、それは魔物となって現れるが、この世界の在<sup>あら</sup>び<sup>び</sup>

人には魔物を倒しても完璧に消滅させる事はできなかった。

まるで雑草を刈り取るだけのように、根からは根絶できない。

しかし、神祇官しんぎかんが他の世界から召喚した異人『巫女』にはそれができる。

召喚された少女は元の世界で孤独の真ただ中にいた。

だからこの世界に召喚されて、初めて見た美しい男に恋され恋し、それがこの世界を救う動機になった。

そして長い旅の末、一番の瘴気を浄化し——世界の理に知らされた真実。

巫女が浄化していたと思っていた汚れは、全て巫女の体の中に入り込んでいたと。

その汚れの、限界はあと一滴であふれるほどに来ていた。

弾ければ混ざり合った汚れは、浄化する前よりもひどく、世界を汚す。

それは世界が終わる日。

巫女の世界には、汚れの概念ルーンがなく、巫女にはその耐性かこの世界の人間より比べられないほど高く、元の世界にそれを持ち帰ればその概念は弱まり、本当の意味で汚れは霧散すると。

つまり巫女は——汚れを安全に捨てるための入れ物であり、運び屋だったのだ。

巫女が世界を去るまでが、この世界を救う伝説の本当の終わり得不文律。

それを知ってもなお、巫女が愚痴も言わず粛々と運命を受け入れるのは、ひとえに『愛しい男』のためだ。

勿論、その対象は男ではない。

金髪碧眼の完璧な美貌と体軀をもち、眉目秀麗、頭脳明晰、文武

両道、優しく皆から慕われる女性の理想の具現であるこの国の王子、ユーリン。

巫女はその愛しいユーリンの為に、彼の住む世界を離れる決意をしたのだ。

——愛しい、ユーリンか。

そう思うだけで、男は苦虫を噛み潰したように、心が重くなるそれは、罪悪感だけでは無いのは分かっていた。

「そんな顔しないで？ 貴方がそんな顔していると調子狂っちゃうよ」

「そんな顔とは？」

「世界が終わるような顔してる」

「……お前のおかげで世界はまだ終わらない、感謝している」  
「本当に、らしくない」

神秘的な黒曜石のような少女の瞳が揺らめいた。

そして男をじっと見つめる。

男は心の中を見透かされそうでたまらず、目を伏せた。

「大丈夫、そんなに悪いと思わないで、私全部知ってるから」

一瞬、何を言われたのか男はわからなかった。

そして、その真意が図りかねて、うかつに返事を返せない。

「ユーリンが私を好きじゃないってことぐらい、今ではもうわかつ

てる」

「……………何故、そう思う？」

巫女は相変わらず笑顔だった。

笑顔にはそぐわない、セリフ。

だから男は誤魔化せるかと、質問する。

「だって、好きでずっと見てたから、わかっちゃうよ……ユーリンの本当に好きな人は別にいるって。でも、私、わがままだから見てみないフリした、もしかしたらこのまま一緒にいれば本当に私の事を好きになってくれるかもと、甘い期待をしちゃったんだ」

だから何も知らないで騙されてる愚かな女を演じ続けた……でも。言いかけて、巫女は言葉を切る。

その後に続く言葉は言わなくても、痛いほど男には見て知っていた。

——ユーリンの気持ちは、長い旅を終えても揺るがなかった。

それを巧妙に隠し、巫女の忠実なる騎士<sup>しもべ</sup>としてユーリンは巫女に恋する男を演じ続けた。

男は巫女が幸せそうにしているのでてつきり知らずに甘い夢を見ていると思っていた……しかし、知っていたのなら、それはなんと残酷なことだっただろう。

「そうか、それは気付かなかった」

「ユーリンは私が伝説の巫女だから、親切にしてくれてただけなんだよね……本当に。だから明日、おとなしく帰るのはお詫びというかお礼というか、そーいうもののなの」

お詫びなど不要だと本当の事を言いかけて、男は口を閉ざした。それは禁じられている事なので、男の一存では口にしてはならないこと。

「実らなくても一生分の恋をした、だから私はこの世界を去っても満足なんだ」

元の世界で両親を失った孤独な少女に、美しく優しい男が付け込むのは容易だっただろう。

しかもそのために、長い年月を掛けて作られてきた『王子<sup>モノ</sup>』なのだから。

代々の召喚で呼ばれる巫女は女性だった。

そんな違う世界から来た人間に、自分のものではない世界を救う危険を伴う仕事をしろといっても容易に受け取ってもらえるはずもない。

代々の王と神祇官達は理由を作り出そうとした。

代々の古い記録を読み取り、上手くいった例を参考として。

——反吐が出る話だ。

まるで人参<sup>ごぼうび</sup>をぶら下げて走る馬ではないか。

そうやり口に嫌悪感がこみ上げるが男も王族の一員。目の前のひとりの女の子の人権よりも世界を取った。

王家は代々、巫女を惑わすために美しい子孫を残そうと躍起になっていた。

男もユーリンほどではないが王族の端くれ。銀の髪にアイスブル

ーの瞳の、まるでこの闇夜に輝く月のように十分に美しい容姿をしている。

召喚の間に、不本意ながらも呼ばれ、王族がで迎える中――巫女は視線をユーリンに合わせた。

それが、ユーリンが本心を隠して、彼女を大事にしなくてはならなければならない<sup>きっかけ</sup>理由。

召喚当初の巫女の世話係はユーリンとなり、ユーリンは不安な巫女の心を確実に捉えた。

嫌がるユーリンを長老と王は彼の想い人を人質にすることと、巫女が無事使命を全うすれば、結婚の許しも与えたのだ。

流石に巫女はそこまでは知らないだろう。

でも、知っても何も変わらないのかもしれない。

それほど静かで穏やかな告白だった。

「わかってユーリンの優しさにすがってた、本当にヤナ女だね」  
「そうでもない」

本当に嫌な女なら、騙されていると分かっているながら、相手の為に何かできるだろうか。

それは彼女がどれだけユーリンを好きだったかという現れだ。

「それで何故、俺にそんなことを話すんだ」

「え、そうだなあ。ユーリンにいままで付き合ってくれてごめんねって謝ってくれて伝言、一番いえそうだったのと」

考えるように巫女は首をかしげる。

「この世界で、貴方だけが私に嘘をつかなかった、からかな？」  
「……」

その答えに男は絶句した。

「私が巫女だからって持ち上げる世界の中で、貴方だけが有りのままで私のこと嫌いって示してた、でも、いざというときは、なんだかんだ言いながら助けてくれたよね」

「世界を救うのに手を貸すことはこの世界に住む者の義務だ」

——義務。

男は正しい言葉を発しているはずなのに。自分で使った単語に違和感を覚えた。

「ふふ、正直だね。夢のような嘘の中で、貴方だけが本当の事を言ってくれる」

だから信じられるの。

笑う巫女に、「伝言は伝えてやる」と、男はそっけなく言い放つ。満足そうにじゃあね、と言って巫女はまた夜の闇に消えた。

「……いいや、俺は一番の大嘘つきだな」

消えゆく巫女の背中を見ながら届かない呟きもまた、夜の闇に掻き消える。

いや届かないからこそ、呟ける、男の紛れもない本音。

——お前が好きだ。と言わないのだから。





## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1056m/>

---

短編集置き場。

2011年12月2日20時45分発行